

IS FALL～紅蓮の剣～

しじる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

篠ノ之箒。

篠ノ之束の妹として有名な彼女は、ある日謎の光に包まれて別の世界に飛ばされる。

そこは巨人と巨人が争う世界、地球より遙か離れた大地にて、人が争う。

エイペックスプレデターズ、その傭兵团に拾われた彼女は、1人のパイロットとして戦地を駆ける…

目 次

第一章・タイタンフォールの世界

ACT 1	プロローグ	1
ACT 2	思い出語り	8
ACT 3	賞金稼ぎ	12
ACT 4	愉快な?仲間たち	22
ACT 5	彼らの異名	26
ACT 6	ウォーゲームス	34
ACT 7	篠ノ之箒の1日	43
ACT 8	赤い亡靈	50
ACT 9	ブリーフィング	61
ACT 10	エンジエルダンス【あるミリシアバイロット視点】	69
ACT 11	エンジエルダンス	76
ACT 12	帰還	76
ACT 13	エンジエルダンス【カレル視点】	79
第二章・帰還、学園の始まり		
ACT 14	入学前日譚	83
ACT 15	入学試験	86
ACT 16	再会	91

第一章・タイタンフォールの世界

ACT1 プロローグ

俺が見てきた戦場の中でも、パイロットほど優秀な戦士はない。

どんな状況でも、臨機応変。

華麗で、圧倒的。

常に冷静で、冷酷。

パイロットの手に掛かれば、ただの壁でさえ、戦術の一端となる。様々な技術で敵を翻弄する、戦闘も段違いだ。

だが…パイロットと一般兵の1番の違いは……

パイロットとタイタンとの、【絆】だろう
ミリシア所属、英雄となつたライフルマンのログ……

地球より遙か離れた、とある外惑星。

そこで人間同士の殺し合いが起こっていた。

片方はミリシアと呼ばれ、もう片方はIMCと呼ばれている。

両者の銃撃は激しく、多くの命が散っている。

しかし、その弾丸の雨の中、駆け抜けた存在がいた。

そのものは、腰に大きなブースターのようなものを持ち、そこから火を吹かせながら、【壁を走っていた】。

懐から1本のナイフを取り出し、眼前の建物の壁面へ投げつける。微弱な振動^{バルス}が、壁の向こうに隠れる存在を、その者にだけ照らし出す。

腰から小型の爆弾をさらに投げつけ、その壁面を吹き飛ばす。

爆音と共に室内に突入し、その手に持ったショットガンで、中にいた兵士たちを一瞬で撃ち倒す。

【マスティフ】と呼ばれるそれは、射ち出した弾を平行に射出し、兵士たちに一直線の線穴を開ける。

あらかた兵士を撃ち殺したそのものは、弾が切れたのか、ショットガン下部から弾を装填しつつ走る。

しかしその速度も常人では追いつけない。

腰のブースター、ジャンプキットと呼ばれるそれが炎を吹いて、その走りを加速させていた。

一直線の通路を駆け抜け、奥の窓を蹴り割り外に出れば、そこにいるのはやはり敵。

腰からさらに手裏剣のようなものを投擲する。

それは空氣に触れると同時に燃えだし、溶けた鉄を撒き散らす。

ファイヤースターと呼ばれるテルミットを撒き散らすそれは、見事兵士たちの集団中央に着弾。

熱と痛みで混乱する兵士たちに穴を開け、更に走る。

しかし同じような姿をしたものが、前方から壁を走りながら現れる。

そのものの手には、小型の機関銃。

【オルタネーター】と呼ばれる、二連装^{ダブル}の銃身^{バレル}のサブマシンガンが火を吹き、青い軌跡と共に命を食らおうと凶弾を放つ。

しかしそれに動じることなく、ショットガンを持つものは地面を滑走：スライディングを駆使し、自らの頭に向かつてきた弾を避けつつ、サブマシンガンの所有者の頭。

そこに弾丸をぶち込んだ。

赤と共に、粉碎されたヘルメットが宙に舞う。

サブマシンガンの所有者、その亡き骸が地につくより先に、ショットガンのものは更に走り、壁へ飛ぶ。

ジャンプキットがさらに炎を吹き、壁を高速で走り抜けていく。すれ違いざま、自身の下方に見える兵士たちにショットガンを撃ち込みながら、止まることなく走る。

「敵のパイロットを発……!」

言葉は続かず、発しようとした兵士の頭が割れる。

敵対する兵士たちは、皆パイロットと呼ばれたショットガンの持ち主を狙い、そして撃ち始めるが当たらない。

正しく蝶のように舞い、蜂のように刺す。

弾の縫い目を搔い潜るように、パイロットは兵士たちを、そのショットガンで撃ち抜く。

『パイロット、タイタンの準備は出来ているぞ。指示を待つ』

男の声が、パイロットの耳に入る。

それと同時に、パイロットの前に現れる巨影。

およそ5～6メートルあるだろうか。

ずんぐりとした、だが複眼が目立つ鉄の巨人。

タイタンと呼ばれる存在、その中でも重量級オーガと呼ばれる【スコーチ】であった。

通信がパイロットの耳に入る。

それは【スコーチ】のパイロットからだ。

『覚悟しろ、エイペックスの傭兵め！』

スコーチの手に持った、テルミットランチャーが吠える。

大量のテルミットが放物線を描いて、パイロットへと向かう。

直撃は死、骨すら残らん。

知っているパイロットは、それを鮮やかに壁を使い避ける。

壁へ壁へと跳ね回り、【スコーチ】にろくに狙いを付けさせない。

『ええい、ちよこまかと!!』

痺れを切らした【スコーチ】の搭乗者は、スコーチの左手を前に押し出す。

すると炎の大盾が現れる。

ヒートシールドは【スコーチ】の持つ最高火力の防御兵装でもあります。

攻撃兵装。

生身で受けければまず灰だ。

それを大きく振り払い、飛び回るパイロットを焼こうとした時だつた。

それが最後に聞く音となつた。

「……遅いぞ、【ローニン】」

パイロットの咳きごとに、【スコーチ】は何かに潰された。

その何かは、【スコーチ】と同じタイタン。

しかしスラリと細いその姿は軽ストライダ量級と呼ばれ、機動力が売りであつた。

『申し訳ありませんパイロット』

自身の胸部を縦に開く。

そこはコツクピットがあり、乗れとパイロットに指示していた。

そう、この【ローニン】は、このパイロットのタイタンだ。

パイロットも、何も言わずにローニンに飛び乗り、ハツチを締めた。

『剣を委ねます、パイロット』

その言葉を残して、【ローニン】が消える。

白いモヤが残され、それからまたローニンが現れる。

そこは敵の背後。

【スコーチ】であつた。

当然搭乗者も、先の機体とは別人だ。

背後を取られた【スコーチ】は、慌てて後を向こうにも、【ローニン】の背負つた巨大な剣が振り上げると同時に放たれた、電気の柱に擊ち抜かれ、その行動を阻害される。

その隙に、【ローニン】は手に持ったショットガンを至近距離で撃ち込み、【スコーチ】の装甲を削りとる。

既に他のものに痛めつけられてたのか、【スコーチ】の装甲は全て禿げ、コアパーツが剥き出しになる。

『処刑、斬鋼』

ローニンが剣を振るい、【スコーチ】の胴体を斬り揺らす。

ハツチが跳ね飛び、バランスが崩れる。

すかさず二撃、脚部を切り飛ばす。

地に伏せる【スコーチ】、トドメと言わんばかりに剣を突き刺した。

中にいたパイロットごと、剣は【スコーチ】を貫き、引き抜けば爆散。

鉄屑とかした。

『敵タイタンを撃破』

【ローニン】が搭乗者に伝える。

それと同時に、男の声がパイロットに伝わる。

それには喜びが混ざっていた。

『臆病者が撤退していくぞ、良くやつた！』

それを聞いて一安心したが、ヘルメットを脱ぐ。

鉄の仮面、その素顔は整つており、凛とした表情に1つに束ねた長い髪。

釣り上がった瞳には強い意志が見える。

侍、彼女にはそれが似合う風貌であつた。

『敵の脱出艇は俺たちに任せて休んでろエース！』

『アウトローは皆殺しだあ！フウー!!』

彼女と、彼女の乗る【ローニン】を、他のパイロットやタイタンが走り抜けていく。

どうやら彼女は、撤退していく敵には興味が無いようだ。

ほう、と一息つき、深く座席に腰をかける。

終わつたという達成感と、戦場からの解放感、そして仕事を果たしたという充実感。

それらが同時に来たことが、彼女の今の行動に繋がつた。

また生き残れた…そう心に思いながら、彼女は迎えの艇を待つた…

そうして数分もすれば、脱出艇はたどり着き、自分たちの戦艦へと連れていく。

それはこの外惑星より離れた宇宙空間に漂う物。
【エイペックスプレデターズ】と刻まれたロゴとエンブレムが目を引く。

これが彼女の所属する場所。

非道で冷酷、残虐極まりない傭兵团として知られる【エイペックスプレデターズ】。

そこが彼女の帰る家であった。

彼女が家路に付き、食事にありつこうとする頃、船内は既に宴会状態。

むさ苦しい男どもが酒を飲みあつてた。

「お、今日のMVPのお帰りだ!!」

皆が彼女に駆け寄る。

彼女は迫る酒気に嫌な顔をするが、すぐに笑みになる。
いつもの事だからだ、ここでは。

男どもが彼女に聞く、今日の戦績スコアを。

彼女はそれを得意気になることもなく言う。

謙虚であるとだれかが言う。

そうかもしれないと彼女がつぶやく。

それでもまた皆が笑う。

これもまたいつもの光景。

そうして1人がジョッキを掲げる。

いわゆる乾杯の音頭だ。

「あ～、既にみんな出来上がつてゐるが…改めて乾杯だ！今日のMVP、

【篠ノ之箒】に乾杯!!」

皆がその名を口にして、ジョッキを大きく振り上げた。

そう、これはこの世界に渡つてしまつた彼女の物語。

彼女がここでは生き、元の世界に戻り、そしてその生涯を終える。

それまで綴られる物語。

——紅蓮の剣の物語——

ACT2 思い出語り

【篠ノ之東のオマケ】

私は、姉さんがISを開発したその日から、そう呼ばれ始めた。
IS、正式名【インフィニット・ストラトス】。

無限の成空圏の冠するそれは、宇宙へと単独航行を可能とするマルチフォーマルスースであった。

しかしそれは、白騎士事件によつて変わる。

白騎士事件：日本に向けて、何者かにハッキングされたミサイル2000発が放たれ、それを白騎士と呼ばれるISが、鎮圧に向かつた自衛隊諸共撃破してしまつた事件。

死者0名で幕を閉じたこの事件によつて、ISは兵器として見られるようになつた。

その事もあつてか、姉さんの妹である私は、その身を保護されるようになつた。

【要人保護プログラム】だつたか？

それのせいで、私の家族は散り散りになり、姉さんは雲隠れ。私自身も何度も名を偽つて、転校を繰り返すことになつた。

孤独だつた。

誰も友人を作れず、作ることを諦め、そしてそれを相談する相手もない。

悲しみに明け暮れても、それでも生き続ける。

私には思ひ人がいたからだ。

その人に、思いを告げるまで、死ぬ訳には行かなかつた。そうやつて、心だけは死に、体は生き続けていた頃。

私はあるものを拾うことになる。

それは機械のパーツのようだつた。

ISのせいで機械嫌いになつてた私だが、それは何故か見とれた。子供特有の好奇心からの行動だろうか？

そうしてその機械のパーツに触れた途端、辺りが光に包まれ：

「そして今に至る……か」

自虐的に呟く。

ここは名も無き宇宙空域。

そこを私たち【エイペックス・プレデーターズ】の戦艦が漂っている。
現在私はタイタン整備室にて、過去に自分が書いた日記を改めて見直していた。

今思うと、子供だつたと。

この世界に来た時、私はこの傭兵团に拾われた。

ここに傭兵の1人、ベアリバーゲリンの氣まぐれだ。

皆からBBの愛称で知られている。

当然気まぐれで拾つてきたものだから、団長のブリスクは烈火のごとく怒った。

「ガキを拾つても金にならん、むしろ無駄な浪費だ」つて。

私自身、人殺しの世話になんかなるものかと、当時は意地を張つた。

今思えば、だいぶ無謀だつたな。

仮に本当に弾き出されていたら、私はのたれ死んでいただろう。
なんせこの世界に私の戸籍はないのだから。

金もなければ戸籍もない、仕事もつけない。

結果的にBBが自分の給料で養うと言つてくれなかつたらどうなつてたか。

それからは私はしばらくの間、のうのうと暮らしていた。

人殺しなんてと罵倒しつつ、その金のおかげで暮らせてると考えもせず。

この考えが改まつたのは、そばにいる【相棒】のおかげだ。

視線を頭上に向ける。

『……パイロット、どうしました?』

渋く、いい男性の声が響く。

軽量級タイタン【ローニン】、型式番号はFT2035。

えふていーとは言いづらいから、そのままローニンと呼んでるが、本人はえふていーと呼んで欲しいとか?

タイタン、全長5~6メートルの鉄の巨人。

重力は40トン近くあり、踏まれようものなら一溜りもない。

元は宇宙空域での作業用ロボットだったそうだが、今では専ら戦闘用となつてゐる。

元宇宙空域用と聞いて、最初はISを思い出して、ますますひどい顔になつたことは、今でも鮮明に覚えている。

だけど、こいつはISと違つて喋る。

最初はなんとなくだつた、こいつと話したのは。

暇で、ただ傭兵達の金で暮らす日々に耐えられず、ブリスクの言つてを破つて、この整備室に入り込んだ。

そこで、コアだけのこいつにあつたんだ。

正確にはコアと対話インターフェイスか。

初めは、同じ和の雰囲気を感じる奴だと思つた。

浪人^{ローラン}という名前なんだから当然かもしれないが。

武士のようなやつで、この傭兵团で1番話が合う奴だつた。

そうして会話して、こいつが戦場に立ちたがつてゐるのを知つた。ブリスクに大目玉を喰らうのを覚悟で、今までのことを話して、このローニンを戦場に出してくれと頼んだ。

だけれども、意外なことに大目玉は喰らわなかつたが、乗るパイロットがいないため無理だと言われた。

「なら、私がパイロットになる！」

今思えば何を馬鹿なことを言つたのだろう私は。

元の世界に帰つて、一夏に会えなくなる可能性が一気に薄れる選択肢だらうに。

それだけローニンを、1人の【友】として感じるようになつてたのかもしれない。

ブリスクは勿論、他のみんなも反対した。

エイペックスプレデーターズは数少ない女性、しかも一般人と言うこともあって、若干過保護氣味な反対の声が多かつた。

それでも私の意思は揺るがず、どうせなら高みへと【フルコンバット認定】を取りに行つた。

試験者の98%が死亡すると言われる過酷な試験。

今でも覚えてるし、よく生きていたなと思う。

なぜ死ななかつたか、疑問に思うことさえある。

そうして、死ぬ思いで取得し、初めて出た実戦。

ミリシアの特殊部隊を殲滅しろという仕事。

暇で簡単で、楽な仕事とブリスクが配慮して選択してくれた。もつと稼げる仕事を自分がやると言つて。

その好意に甘えて、その仕事を受ければまあ酷かつた。

騙して悪いが：そう言われる日が来るとは思わなかつた。

何が簡単で楽な仕事だ、B Bが援助に来なければ死んでいた。タイタンが4機もいるとは聞いてない。

そんな地獄は、ブリスクが分かつて選んだことで。

「傭兵なんだ、こういう罠もある」とよく覚えておけ」と。

獣が自分の子を谷底に落とすようなものだろうが：限度を知つて欲しかつたな。

そんな思い出に浸つていれば、ローニンが声をかける。

『パイロット、先程からその本を読んでいますが…』

「ああ、私の日記だ。昔を思い出してな…」

この世界に来てからもう5年もたつてる。

仮に元の世界に戻つたら、一夏は私のことを覚えているだろうか？私は20歳になり、酒も煙草もたしなむ程度だが飲み吸いできるようになつてしまつた。

あいつは、今何をしてるんだろうか…

『お前ら、仕事だ！』

唐突に船内に放送が伝わる。

ブリスクの声だ。

彼がそういう時は、全員ブリーフィングルームへ集合が決まつてゐる。

「ローニン、行つてくる」

『また後で会いましょう、パイロット』

ローニンに伝え、私はブリスクの元へと向かつた：

ACT3 賞金稼ぎ

エデン、そう呼ばれる砂漠地帯の街で、IMCの残留艦隊兵が集まっていると情報が入った。

その残留艦隊兵たちはIMCから離反、かと言つてミリシアにすることもなく、宇宙海賊としてエデンを強襲しているとのこと。

IMCは彼らに賞金をかけ、殺せば金が入るようになつた。

私たちの今日の仕事はそれであつた。

いわゆる賞金稼ぎである。

私たちはエデンの南側、砂漠方面から輸送船で突入。

その後やりたい放題やるとの事だ。

そして、今私がいるのがその輸送船。

現在ワープ中でエデンに急行中だ。

賞金首はミリシアからも目の敵にされてるし、同じIMCからは金の成る木として狙われる。

散々だな奴ら、まあそのせいでもライバルも多いということだ。

輸送船が揺れ始める、そろそろ到着か？

三百光年離れた位置にさえ、5分弱で到着するとは…

やはりこの世界のワープ技術は凄いな。

そう思えば揺れは收まり、窓に映る世界が変わる。

星々が輝く宇宙空域から、乾燥した砂漠地帯へと様変わりする。

それを確認したブリストが、輸送船の扉を開く。

ヘルメット越しに、飛んでくる流砂を感じられる。

隣にいる仲間たちも、到着にウキウキして、自分の銃を弄つてる。

かくいう私も、マステイフに異常がないか弄つてるが：

ブリストがこちらに振り向く。

ああ、いつもの言葉を言うな。

私を含むパイロット達が、銃を構え、飛び出す準備を整える。

「聞け！お前らは、この戦いのために生まれた！」

いつも私たちこの戦いのため生まれてるな。

そんなことを思いつつ、仲間の1人が皆に伝える。

「お楽しみの時間だ！」

その言葉を皮切りに、皆一斉に輸送船から飛び降りる。

大体15メートルくらいか？

だがジャンプキットの補助がある私たちパイロットには、この程度の高さでは落下死したりしない。

ジャンプキットが炎を吹き、ゆっくりと着陸させる。

そこからは皆一斉に走り出した。

狙うは賞金首、狩りの始まりだ。

『賞金首をとれば、報酬が手に入る。単純だ』

ブリスクの言葉が私たちを高揚させる。

壁を一斉に走り出す。

すると上空から繭のようなものが降ってくる。

兵士が入ったカプセルだ。

大気圏外の艦隊から、歩兵隊の補給として送られたんだろう。

中から小隊規模の兵士たちが現れる。

まさか蹂躪するのではなく、される側になつてるとは思いもよらないだろう。

懐からファイヤースターを取り出し、着火させて投げる。

テルミット反応によつて溶けだした鉄が兵士達を焼き殺す。

合わせて仲間の1人が何かを投げる。

それは着弾と共に煙を巻き上げ……バチバチと高圧電流を流し始めた。

電気スモークだ、生身の人間ならあつという間に感電死だ。

それに合わせて他の仲間達も射撃敢行。

ものの数秒で兵士たちは全滅。

しかしやけくそとも言えるほど、追加で兵士の入つたカプセルが墮ちてくる。

正しく入れ食い状態だ。

「ぼろ儲けだぜ!!」

ジャツフというパイロットが嬉しそうに機関銃を撃ちまくる。

【スピットファイア】と呼ばれるその火力は笑えない、人間なんて一

瞬で死だ。

しかしそれは一瞬で止まる。

何者かの射撃で彼の脳天は割れて、ヘルメットが吹っ飛ぶ。油断すれば死ぬ、それが戦場。

彼はそれを忘れてしまったのか。

しかしそれより問題なのは、彼を撃ち抜いた存在。パイロットだつた。

ブリスクの話では、他の奴らも来てるとは聞いてたが、かなり早めに来たな。

ヘルメット内でHUDにアップされた情報には【SRS】と……

ミリシアの偵察部隊が何故ここに…

所属は：【特攻兵団】か、サラ＝ブリックス司令が率いる特殊偵察部隊だな。

また強敵に…

何にしても、残留艦隊兵より強敵が現れた以上、残留艦隊兵は一旦後回し、残留艦隊兵を殺しつつ奴らも相手せねば。

私たちの給料は譲らない！

目の前から来る2人のパイロット。

1人はこっちに向かってくる、もう1人は気づいてない。

気づいてる方から殺るか。

敵パイロットが銃を構えて発砲しようとする。

やらせない、ここはマスティフの距離だ。

引き金を引き、水平にいくつも弾が発射される。

弾速が遅いマスティフだが、この近距離でかわせるものか。直撃を受け、パイロットの半身が泣き別れした。

その流れでスライディングと同時にもう1人に一発。

ヘルメットが吹っ飛び、脳漿がぶちまけられる。

これでこの2人はやつた。

周辺に他にいないか確認するため、パルスブレードを地面に打ち立てる。

パルスが波打ち、照らし出す。

……かかつた、1人こちらに来ている。
位置は後ろか！

「パルスブレードを食らえ！」

ブレードを地面から引き抜き、即座に流れで投擲する。

そのタイミングで敵が壁から飛び出したが、投げたパルスブレード
が直撃し、重力に引かれて落ちていった。

『ハットトリック、ナイスキル！』

ブリスクからお褒めの言葉、だが私はそれを聞いてる暇はない。

残留艦隊は苛立つたのか、タイタンまで出てきた。

『くそが、俺たちをゴミのように！』

「事実ゴミだろ」

民間人から武力を持つて搾取する海賊。

私たち傭兵よりもタチが悪い。

掃除すればミリシアにもIMCにもメリットがある。
金も出るならそれは片付けるに決まってる。

「こい、ローニン!!」

『タイタンフォール、スタンバイ！』

私の合図でブリスクがタイタンフォールを開始。
時空を歪めて私のローニンが姿を現す。

ワープフォールだ、通常のフォールより早く到着する代わりに、安
全性が大幅に減少するが、今は速さが欲しかった。

このままだと私が敵のタイタンに潰されかねなかつた。

『パイロット、おかえりなさい』

『ただいまローニン、さあ仕事だ！』

『ローニンソード、パイロットに移行』

ローニンに乗り込み、彼と一体になる。

ローニンの感覚が、私に伝わる。

右手にショットガン【レッドウォール】を構え、敵のタイタンを見

据える。

敵も同じローニンか、なら純粹な実力勝負。

ブロードソードを抜刀、ブロードソードに蓄積されていた電気の奔流が走り出す。

アークウェーブが地を這い、敵のローニンを捉えて鈍らせる。

『うばばばばば!?』

痺れているうちに背面に回り込み、レッドウォールの全弾4発をぶち込む。

ドンッと響く砲火が心地よい。

弾が切れたら、その隙を補うようにもう1発アークウェーブ。敵に反撃の機会を与えない。

あつという間に敵タイタンはスクラップ寸前。

トドメを用意するが、そううまくは行かないのが戦場だ。

敵タイタンの向こう側から銃撃。

それは強烈に重く、一瞬ローニンが大きく退く。

何事かと見てみれば、特攻兵团のタイタンだ。

重量級タイタンのリージョン。

その手に持ったプレデターキヤノンは、タイタンを破壊するには最適な怪物。

冗談じゃない、あんなもので撃たれまくれば軽装甲のローニンは、あつという間にスクラップだ。

「ローニン、フェーズダッシュ!」

『了解、フェーズダッシュ!』

ローニンの言葉と共に視界がモノクロになる。

賞金首ローニンも特攻兵团リージョンも消えて、一瞬の沈黙が支配するが、それはすぐ終わる。

世界がカラフルに染まる。

目の前には先程のリージョンの背中。

レッドウォールを打ち込む、しかし流石に重量級。これだけだとまるで効いていない。

振り返りざまにプレデターキヤノンで殴られる、ローニンが仰け反る。

「があつ!?

『被弾、ダメージ大』

そのままリージョンはプレデターキャノンを高速で回転させる。

砲身が赤に染まる…パワーショットか!?

分かるやいなやバズンツと無数の弾丸が打ち出される。

咄嗟にローニンに指示を出し、剣を抜かせる。

来るいくつかのショットを切り落とし、ダメージを抑える。

しかし全て切り落としている訳じやないので、しつかりとダメージは受けている。

コックピットに防ぎきれなかつたパワーショットの1部が抜けてくる。

顔レスlesslyに飛び散ってきた。

あと少しで頭に直撃してたか…

「やつてくれたな！」

『パイロット、倍返しですね』

ローニンが私の言葉に合わせて呟く。

レッドウオールをリードしつつ、フェーズダッシュのリチャージを待つ。

リージョンは未だ射撃を続けている。

私たちが隠れれば止め、出れば続ける。

こいつ、戦いなれるな…

「ローニン、私を投げろ！」

『了解、ご武運を』

ローニンに私を投擲するように指示、即座にローニンは私をコックピットから取り出し、リージョン目掛けて投擲した。

ジャンプキットの補助がある私は、リージョンに激突して、熟れたトマトのように潰れることなくその頭上に取り付く。そこには円柱状の縁な物体が刺さっていた。

バッテリー、タイタンの動力源だ。

メガジュールとか、聞いたことない単語が使われるほどの電力を有しているらしい。

これを一気に引き抜く、重量級らしくたっぷり入つてゐるな…重いこ

と重いこと。

両手で引き抜く、即座リージョンがバツテリーを抜かれてたことでエラーを吐く。

その間に私はローニンの元へ跳ぶ。

『があ!? この女!!』

『パイロット!』

「ローニン!」

ローニンのコックピットに入ると同時に、リージョンの拳が飛んでくる。

ローニンと即座にリンクし、その拳を腕ごと切り飛ばす。宙に飛ぶリージョンの腕をつかみ、それを棍棒のようにしてリージョンに叩きつける。

「そら返すぞ！」

『なに!? うおあ!?』

自らの腕で殴りつけられたリージョンは大きく仰け反り、その隙にブロードソードをコックピットハッチの隙間に突き立てた。ガズンッと金属と肉が潰れる音が響き、血が吹き出す。

そのまま斬首するように剣を滑らせば、リージョンの上半身が宙に飛んだ。

敵パイロットは断末魔すら上げれず命を落とした。

『敵タイタンの抹殺完了』

「よし、続きだ！」

『了解』

ローニンと共に戦場を走る。

先程の敵ローニンを切り潰し、賞金を得る。

続けてやつてくる艦隊を潰す。

またタイタンがやつてくる。

これを繰り返し、気がつけば残留艦隊兵は全滅していた。

いわゆる狩りつくしたという状態だ。

特攻兵团も、偵察するものがおわったのか、いつの間にか帰還していた。

私は自分の口座を見てみる…

「……昔だつたら卒倒してたな」

恐ろしい金額が支給されていた。

口が裂けても言えないな…〇の数間違えてるんじやないか?

7つ以上付いてるぞ…

これ確かドルだつたよな…

『大手柄です、パイロット。ブリスク団長もきっとお褒めになるで

しょう』

『そうかな…ありがとうローニン』

そう咳き、やがて来たエイペックスプレデターズの輸送船に乗つて、ローニンと共に帰還した。

「気持ちいいがローニン?」

一仕事終え、先の戦闘にて返り血まみれのローニンを洗車ならぬ洗

タイタンする。

皆は既に宴会騒ぎだが、私は先にローニンを綺麗にしたかった。
大切な相棒だからな。

『人間の快樂には數種類あります。性的、感情的、恋愛的、幸福的、物理的。結論、私は78、9%気持ちがいいです』

「相変わらず真面目だな」

機械らしいと言えば機械らしい返答をするローニンに、少し笑みがこぼれる。

それを遠目で見る作業ロボットたち。

マーヴィンだつたか？

彼らの仕事なのだ、本来タイタンの洗浄は。でも私は自分の手でローニンを綺麗にしてやりたかった。

彼らの仕事を奪つてしまつてゐるようで、少し申し訳ないな。

『パイロット、先程から心拍数が下がつてゐます。何か悲しいことが

？』

「え？ああ、いや。マーヴィンたちの仕事を奪つてしまつてゐるようでな…」

ローニンに気づかれたか。

神経を繋ぎあつた相棒だ、バレない方がおかしいか。

『パイロット……いいえ、筈。私は貴女にこうして戦場に立たせてもらつたことを感謝しています。それだけで私は幸福です。これ以上、消耗品の私に思いを寄せすぎるのは危険かと思います』

相変わらず悲しいことを言う。

確かにローニンは、コアが無事なら直ぐ変えの体が作られる。

軽量級の利点だが：私はなるべくローニンを壊したくなかった。

思いを入れすぎて、脱出できないなんて間抜けな結果を、ローニンは避けたいのだろう。

そしてマーヴィンたちの仕事を取つてゐるなんて気にするなどという意味も込めて言つてるのだろう。

マーヴィンたちにも感情はあるが喋らない。

多分私のことも分かつてくれてると思つての言葉だろう。

それでも申し訳なくなる。

「ローニン、安心しろ…大丈夫。流石にお前一人置いて死んだりしないさ。ポジティブに考えるのが良いパイロットのコツだつたな？私は死なない、お前一人にさせない、絶対にな。…心配するな」

そう伝えると、ローニンは了解と呟き黙つてしまつた。

…何か不味いこと言つたか？

「おいモッピ～、お前も一緒に飲もうぜえ!!」

宴会場から男の声、BBの声だ。

というか私のことをモツピーとかいう訳の分からんあだ名で呼ぶのは彼だけだ。

「ああ、ちょうど終わつた。今行く……あとモツピー言うなー！」

こういう返事もやはやお約束か。

ローニンを一瞥し、こう言葉を残して、私は整備室を出た。

「心配するなローニン、【どこ】にも行かないよ。お前を置いてな…」

ACT4 愉快な？仲間たち

エイペックスプレデターズ、冷酷で残忍な傭兵集団。

ブリストクがリーダーで、金さえ貰えれば何だってやる。

帰属意識がない彼らに取つては、このミリシア対IMCの戦争も戦争とは呼ばない。

仕事と呼ぶ。

そんなことで有名なエイペックスプレデターズだが、そこに所属し
てる奴ら全員がそんな残忍な奴らじやない。

私だつてそだ：と信じたい。

現にこの傭兵集団には個性豊かな奴らが大勢いる。

……個性が強烈すぎるのもいるが。

例えばBB、私の命の恩人。

凄腕のスナイパーで、対物ライフルの「クレーバー」、ほぼ透明化し
タイタンからは視認できなくなるクローケを愛用している
使用タイタンは中量級タイタンアトラン【トーン】。

ナイフ捌きもかなりの腕前で、接近戦は格闘術が基本のパイロット
達の中でも、多分唯一ナイフを使って戦つてるんじやないか？

性格だが、私のことをモツピーと呼んだりしている辺りからわかる
ように、かなり気楽でおちやらけている。

ジョークも上手く、ムードメーカー的な役割をしてたりするが、本
人も問題をよく起こす変人だ。

主に機械方面で：元IMCの開発部だつたらしいが、資金が自由に
使えないからという理由で辞めて、傭兵になる程だからな。

エイペックスプレデターズのタイタンは、幹部クラスになると変態
的な変化を遂げるのが多いが、大半が彼の手によるものだ。
しかも本人に無許可（タイタンの許可是貰つてゐる）でやるものだか
らタチが悪い。

おかげで気づけば資金が底をついてたりして、よくブリストクが頭を
抱えていたりするな。

次にスカー、本名不明の傭兵だ。

傭兵集団に雇われる傭兵つてのも変だが。

スカーは3点バースト銃の【ヘムロツク】、ホロパイロットを愛用する、無口な男だ。

使用タイタンは中量級タイタンの【イオン】。

ほぼ何も喋らないが、甘いものが大好きだったり、積極的に会話に入ろうと努力していたりと……

多分無口なのはミニユケーションの取り方が分からぬだけじゃないかと思う。

昔の私を思い出す人だ……年齢は近く違うが。

そして1番の問題児……文字通り児。

カレル、16歳の少女だ。

これまたBBが気まぐれで拾ってきた奴で、私より先にエイペックスプレデターズにいた。

つまり11歳の頃には既に戦場に立つてたんだ。

ありえないくらいの戦闘センスを持っていて、小さな体に似合わない武器、ランチャーにカゴテリーされる【コールドウォーム】と、私と同様【ファイアースター】を愛用している。

肝心のタイタンは重量級タイタンの【スコーチ】だ。

口数が少なく、何を考えてるか分からぬ。

だがその声は容姿通り可愛らしい。

それだけならなんの問題もない。

年齢に関しては私も言えたものじゃないからいい、凄腕なのも文句ない。

問題なのはその趣味。

2つ彼女は趣味を持つていて、どっちも問題しかない。

1つが薬物だ。

興奮剤と呼ばれるパイロットが使用する劇薬があるんだが、それを薄めたものをほぼ毎日キメてる。

流石に原液は、打つと象さえ心停止するレベルだからだろうが……普通の環境ならやめろと言うべきだろうが、彼女は戦場で負った傷を治すために使つて以降こうなつたらしいから、いた仕方ないのかも

しない。

もう1つは……えつと……な、まあR18行動だ。

エロ的な意味でだ：

私が見たのは1回だけだが、殺した兵士を死姦していた。
あの時は吐き気が湧いたのを覚えてる。

だつて、死者でだぞ？

眠りしものへの冒涜だ、あれは。

まあ後でブリスクに「死体で悦ぶな変態が！」と怒鳴られてたな。
その後の「男ならいくらでも買つてやる、そいつで遊んでも金にならん」がなければ見直したんだが…

そもそもなんでそんな行為を始めたのか、こつちは完全に分からない。
それが不気味さを醸し出してる、私がカレルに抱く印象はこんなんだ。

ブリスク、BB、スカー、カレル。

エイペックスプレデーターズで、私がよく会う人物はこれくらいか？

「…………うん、やはり濃い奴しかいないな」

ガメツイ、技術的変態、コミュ障、薬中淫魔。

……ここは変人しかいないのか？

「あんたも充分変人だと思うけどなモッピー」

後から声をかけられて、心臓が吹っ飛びそうになつた。

モッピーということから、十中八九BBだろう。

というか私はまともだろう！？

「いやいや今どき日本人でも、サムライの格好してるのはいないってのは分かるぞ！」

「サムライの格好ではないこれは和服だ！そして私の私服だ！」

「それに木刀差してたら充分サムライだろ！」

この木刀は私がこの世界に来た時持つてたものだ、出来れば離さない。

離せば、元の世界のことを忘れそうだから……つて、あそこの柱の影にいるのはスカーか？

ああ、頼むから混ざりたそうにうずうずするな！

40超えたおっさんが気持ち悪い!!

戦いの時には頼りがいある仲間たちだが……どうしてこんな奴らなんだア？

そんな私の心情なぞ露知らず、暫く私とBBの【私が変人じやない】合戦をしばし繰り広げていた：

ACT5 彼らの異名

ミリシア、かつては宇宙海賊が集つて生まれた、反IMCゲリラ組織。

その組織は、今IMCのとある主要施設を攻め込んでいた。

IMCの水力発電であり、ここが落ちることで、デメテルの戦いの時のように、IMCの足を止めると考えたのだろう。

残留艦隊の補給拠点兼惑星間移動の中継点もあるからだ。

そこは現在、ミリシアの特攻兵团と、フリーランスの傭兵集團【6】の混成集團によつて攻撃されていた。

戦局はミリシアに傾いており、ほぼ勝ちが確定しているだろう。IMCの指揮官は逃げる準備までし始め、下の兵士はそれすら分からず混乱する戦線に戸惑うばかり。

ミリシアには確たる思想があり、士気が高い。

数で潰せるとはい、鳥合の衆とも言えるIMCとは質が違うのだ。

「ゲイツ姉さん、やれますよこれなら！」

【6—4】部隊のパイロットが、リーダーのゲイツに報告する。

押せ押せ状態だ、IMCはやられ放題だ。

パイロットだけでなく、兵士たちも一気に駆け上がる。

ゲイツは確信に近く思つた。

これは間違いなく勝利だろう、しかしながらあるのではないかと。いくら何でも、敵の重役の引き際がうますぎる。

IMCお得意の、トカゲの尻尾切りにしてもだ。

罠の可能性を考えるが、それにしても失うものも大きい。

他のことを考えなければ。

その思考が混ざり始めた時だ。

「姉さん!? 突入部隊全滅、奴ら基地を核自爆させやがった！」^{（ユーフリア）}

やはり罠であつた、しかしそれにしてもかなり規模の大きいものだつたのは流石に戸惑う。

「みんな落ち着いて、ミリシアの兵士たちはブリックス司令が何とか

する、私たちは私たちの仕事をするのよ』

しかしそこは司令官、焦りを見せることなく、皆を導く。

中にいたミリシアの突入部隊だけでなく、IMCの兵士たちも死んだろう。

相変わらず奴らは人の命をなんだと思ってるんだ、そんな怒りが彼女に満ちるが、それさえかき消す驚きが彼女達を襲った。

『こちらミリシア歩兵隊、敵タイタン複数フォール！ 所属は……エイペックスプレデターズ！？』

『おいあのペイントとノーブルアートは！』

『赤い亡靈』と【焦土の死神】だ、逃げろお!!』

『こっちには【レッドレーザー】だ！』

戦場から混乱した通信が入ってくる。

しかも流れてきた【名】には覚えがあつた。

名と言つても、その強さから畏れられ付けられた名。

異名というものだ、それら全てにゲイツは心当たりがあつた。

タイフオンの戦いで、タイタン10機を1人で切り倒したローニン。

赤と黒のジラフ迷彩に、亡靈のノーブルアートが【赤い亡靈】という名を与えた。

その怪物の強さは、戦果を聞くだけで分かるだろう。

【焦土の死神】は、赤と黒のペイントに死神のようなノーブルアートを刻んだスコーチ。

戦略的行動が得意で、一瞬の隙を付かれて焼き殺された者は数しえず。

特に強化装甲を愛用してるので、ばらまかれたテルミット溜まりに映る姿が、【焦土の死神】の名を与えた。

最後に【レッドレーザー】、レーザーストライプを刻んだ赤と黒カラーのイオン。

拡散レンズによる5ウエーブスプリッターによつて、多くのタイタンやパイロットが塵と化した。

それだけに終わらず、確実に敵を殺すという意思があるのか、倒れ

たタイタンにレーザーコアをぶち込み溶解させることも多々あると
⋮

「分かつてたとはいえ、このタイミング……最悪だわ」
やつてきた厄災に、ゲイツは頭を抱えた。

『パイロット、生身で戦う必要は無い。仕事内容は敵タイタンの殲滅、
歩兵をやる必要はないぞ』

ブリスクからの仕事内容の確認が伝えられる。
いわゆるタイタンブロール。

しかし仕事を貰った時と状況が違いますぎないか?
だからIMCの仕事は基本割に合わないんだ。

ブリスクが3、4倍額払わせてもらつて無かつたら撤退してたぞ。
しかも核自爆させた区域に落とすか?

パイロットスースのおかげで、放射線を気にしなくていいが…
『パイロット、始めましょう』

「ああ、ローニン行くぞ」

愚痴を言つても始まらない。

今日はBBを除くいつもの面子。

スカーとカレルと一緒に出撃だ。

カレルと通信を行う、すると喘ぎ声が聞こえてくる。

早速キメてるな…カレルはタイタンでの戦いをやる時はいつもキ
メるからな…

「おい、行くぞカレル。私が突っ込むからガス缶を撒け」

『あひ、あつ……んっ！了解いいい!!』

それを最後に通信を一旦切る。

お互いここからは言葉なんかなくとも分かる。

伊達に5年間一緒に戦つてない。

スコーチが離されない程度にスピードを出して駆ける。

早速一機、トーンか。

アークウエーブを放ち、痺れさせる。

ちょうど他のものを見てたのか、直撃を受けてくれた。動けないやつの後に回り込む。

正確には私から見てスコーチが真正面に見えるようだ。いわゆる挟み撃ちだ。

奴がアークウエーブを食らってようやく氣づくが、もう遅い。ガス缶がばら撒かれ、逃げられないよう在我ももう1発アークウエーブを放つ。

それに合わせてカレルがテルミットランチャーを発砲。

そらあつという間に焦土の出来上がりだ。

摂氏3000℃を超える高熱に包まれ、敵トーンが溶解していく。逃げようにも、逃げ道には私とカレル。

運命は決まつてた。

『ウハハハ！いただきまあああすう!!』

カレルのスコーチのボティーブロー2発が、トーンを抉る。

鈍い音と共に倒れ込んだトーンに、トドメと言わんばかりにフレイムコアをぶち込む。

トーンだつた鉄塊の出来上がりだ。

『んんっ！きもちい…あふあ…』

「まだまだいるぞ、まだ果てるな」

軽口を叩きながら次の獲物を狙う。

ちょうどスカーが敵のタイタンに裏拳を与えていた。

そしてレーザーコア、そのタイタンが何だつたのか確認する暇もなく、溶解した。

もうこの時点で2機やつた。

しかしそまだ敵タイタンの反応がある。

私はカレルと共に駆け出す。

そうしてしばらくすれば、残りタイタン数は指で数えれるほどです。
爆発が続く戦場を走り抜け、敵タイタンを見つけては焼くか切り潰す。

そうしてしばらくすれば、残りタイタン数は指で数えれるほどであつた。

『お見事です。パイロット、敵タイタン数残り僅か』

ローニンから賛辞が述べられ、それと同じく敵タイタンをまた見つける。

これは：ノーススターか。

軽量級タイタン、ノーススターは狙撃特化のタイタンで、唯一大気圏内で飛行できるタイタンだ。

いや、プルートがいるから唯二か？

何にしても、やつの使うレールガンには当たりたくない。
あれはガードしたらブロードソードが折れかねない。

氣づく前に近づきたい。

ノーススターはスコーチの天敵だ。

飛行されたら、スコーチの攻撃がほぼ無力化されてしまう。
カレルの援護は期待できない：

私だけでやるしかない。

「ローニン！」

『了解です』

一気に走り出す。

それに合わせてノーススターも音で氣づく。

レールガンが向けられた。

砲身が赤に染まり、打ち出されるそれは空気を割く。

「フェーズ！」

言葉に合わせて、ローニンが一時的にこの世界から消える。

また現れた時にはノーススターは目と鼻の先。

しかし何の対策もしていないノーススターではない。

ガチャンと音が響き、ローニンが拘束された。

ノーススターの防御兵装【拘束トラップ】か！

一瞬動きが止まつた瞬間、ローニンに痛烈な衝撃。レールガンの直撃だ。

体が強く揺さぶられ、ローニンの1部が抉られる。だがそれで気絶などするものか、冷静にトラップの基盤を撃ち抜く。

トラップは破壊され、ローニンが動けるようになる。

手こずつたのが不味かつたか、ノーススターは軽量級の長所高機動で遙か彼方。

このまま追うのは得策じやない。

長距離戦はノーススターの独壇場だ。

一時退却、周辺の障害物に身を隠す。

「くつ、どうする…」

『フェーズリチャージまで待機を推奨、その後アークウエーブ』ローニンが提案する。

確かにそれが一番だろう。

私はフェーズダッシュのリチャージを待ち、それと同時に飛び出す。当然ノーススターは待ち構えており、レールガンが飛んでくる。

ローニンに伏せさせ、ギリギリで回避するが、2回目は通用しないだろう。

ブーストを吹かせ、全速でノーススターへ駆ける。

トラップが起動した音が響く、ローニンがまた固まる。

また撒いていたようだが、今度は手間取らない。

2度目のフェーズダッシュを行い、別世界へ。

白と黒の世界に移ればトラップは外れ、また出現した時はノーススターの真後ろ。

アークウエーブをうち放ち、その動きを止める。

「これで終わりだあ!!」

隙だらけのその背中に、ブロードソードを突き付ける。鈍く、だが鋭い音と共に、ノーススターは貫かれた。

『お、おのれ傭兵……っ！』

それはノーススターに乗つてたパイロットの恨み言だろうか？
しかしそれもすぐにかき消された。

ブロードソードを引き抜き、もう1発アーケュエーブを叩き込む。
それにより、莫大な電力負荷に耐えれなかつたノーススターは爆
散。

その骸を戦場に晒した……

「おい、立てないのか？」

私はスコーチの中で、いろんな意味でイツてるカレルを引きずり出
していた。

今日はだいぶ仕留めたようだ、足腰が立たないらしい。

彼女はタイタンを破壊するたびに、その喜びで達するからな…
逆をいえばそれだけ今回タイタンがいた事になるが…

「2人ともよくやつた、ほれ」

その声とともに、よく冷えた瓶が飛んでくる。

酒か、しかも結構いい銘柄だ。
片手にカレル、残った手に酒。

珍妙な格好だが気にしない。

ところで私に酒を渡したブリスクは…

「約束通り払つてもらうぞ、使えねえクズ」

やつぱり怒り心頭で、さつさと逃げたIMC高官から金を搾り取つ
てた。

まあそななるな…

「2人ともお疲れさんです！スカーもナイスだぜ！」

BBまで酒を片手に……あれ、もう出来上がつてないかこれ？

髭ずらが真っ赤に染まつてる。

うん、間違いないな。

「今日留守番だつたからつて、ずっと飲んでたなお前?!」

そう言えば機械方面の変態ではあるが、それと同時に酒好きだつた
なあお前！

「硬い」というなあモッピー！お前も呑もうえ！」

「うえつてなんどうえつて！ああ近寄るな、注いでやるし、呑んでもや
るからその酒臭い息やめろ！」

今日もエイペックスプレデーターズの船内は、喧しい。

そして非常に酒臭かつた…

ACT6 ウオーゲームス

VRを知ってるだろうか？

ヴァーチャルリアリティの略であり、仮想現実世界という方がわかりやすいだろうか。

私たちは今、いつもの【エイペックスプレデターズ】戦艦内の【シムポット管理室】にいた。

シムポットとは、先にあげたVR空間にダイブするのに使う施設で、タイタンとのリンクするようにリンクすることで、VR世界に飛び込める。

もちろん、よく昔小説とかで話に聞いていたVRゲームをするためにあるものでは無い。
…出来なくはないが。

これは戦略シミュレーションをするための側面が強い。

そう、何故私が今そんなシムポットに入つてるか見えてきたらうか？

交流戦だ。

IMC傘下の勢力、ワインソンダイナミクスとの演習のために、私たちにはシムポットで待機していた。

なんでも、ミリシアの数より質に押され始めたIMCは【数で勝つてるんだから、質も勝つてやれば楽勝じやない？】とようやく思い始めたようで、いくつかの傘下組織で交流戦を始めたらしい。

私たちの交流戦もそのうちの一つであつた。

「今回の交流戦は、敵味方をランダムに入れ替えてのシャッフル戦だ。俺達にはいつも通りだがな」

右隣のシムポットに入つてのブリストクの声が聞こえる。

今回はブリストクも参加し、向こうの代表アッシュも参加するとのこと。

しかしアッシュか…顔を合わせたことはあまりないんだよな。

【タイフォンの戦い】の時、私はカレルと一緒に別の惑星に仕事に行って、最後の最後しか参加していないからな。

凄まじい戦いで、ブリスク曰く「最初からいなくて運が良かつたな」と言つてたからな。

アツシユも、その戦いで死んだと思われていたらしい。

実際はヴィンソンダイナミクスに体を再生させられたおかげで生きてたようだが。

アンドロイドの肉体故に出来る生存法だな。

そう、アツシユは恐らく人間だつた存在。

肉体を機械化してる為、死に戻り、そんな戦法も取れる。

まあ、VRではそれは誰もができるから関係ないか。

『では…そろそろ始めましょう?』

アツシユから通信が入る。

流石にアツシユたちはヴィンソンダイナミクス分社で、シムポットに入つてる。

宇宙空間故に電波は常に3本立つてる。

途中で回線が切れるなんてオチはないだろう。

「リンク、スタート…っ!」

私は目を閉じ、シムポットへとリンクを接続し、その意識を少しの間手放した……

視界が色とりどり、夜の街…それとデジタルオブジェクトの融合した混沌世界。

ウォーゲームス、このシムポットの基本戦場。

ここが今回の演習場に選択されたようだ。

懐かしい、パイロット認定試験の最初の方を思い出す。

あの時はのちのち死ぬかもしれないと思うハメになるとは思つてなかつたな…

感傷は置いておき、私は周りを見渡す。

今回味方になつたのは……

「嘘だろ…なんてこつた」

なんと全員がヴィンソンダイナミクス。

私だけエイペックスプレデーターズだ。

なんという酷いミキシング、しかもアツシユがいないところを見る
と、アツシユはエイペックスプレデーターズ側にいるということ…

「へ、ヘヴィだ……」

つい最近覚えた横文字を使いつつ、頭を抱える。

なるほどヴィンソンダイナミクス所属のパイロット達、彼らはその中でも最近パイロットになつたばかりのものらしい。

よく戦場で共に戦う【傭兵パイロット】ではない。

余計に頭が痛くなる。

こんな素人と共に戦えるか！

ましてや相手は私がよく知つてる、そしてよく知られてる……

ああっ!!

「上等だ、やつてやる!!」

半ばやけくそに叫び、私はマステイフをしつかりと手に持つた。

それに合わせて、開戦を告げるベルが響く。

ジャンプキットに入れ走り出す。

後ろの普通に走つてる素人なんか知るか！

お互ひのコンビネーションなど無いに等しい奴らと組んでも死ぬのが早まるだけだ。

これはシユミレーション、守つてやる必要は無い。

そもそも、シユミレーションなら死んで覚えるということが出来る。

エイペックスプレデーターズの、私の、自慢の、ちょっと変な仲間たちにさんざん殺されて、学んでこい!!

だが私はそれはゴメンなんでな。

目に映るデジタル壁を蹴り、ブーストを蒸して走る。

視界が狭まり、世界が素早く変わっていく。

デジタルと街、その境界点。

そこで最初にコンタクト。

私が最初にあつたのは…：

「うつ、スカー!!」

「……」

相変わらず無言でヘムロツクを向け、発砲。流石に食らつてやれない。

パルスブレードを壁に突き刺し、強制的に一時停止して軸をずらす。

だが2度目はうまくいかないのは承知。

ファイアースターを着火しぶん投げ、目眩しを行う。

精密射撃を要求されるヘムロツクにこれは厳しいだろう！

マステイフをうち放ち、彼の頭部に炸裂。

間違いなくやつ……てない！

これはホロパイロットか！

ホログラムに引っかかった私の運命など決まつてた。

「こっちを見る…」

「つ?!あつ!!」

振り向けばスカーのキックが…あれ？

スカーがすり抜けた？

それが何度も繰り返され、これはまたホログラムかと怒りを露わにする前に、その幻覚の蹴りは終わりを告げ…その先に拳銃を私の眉間に構えたスカーがいた：

パンツと乾いた音が響き、私の視界がブラックアウトする。

【スカーに殺害されました】

「ああつ!!」

苛立ち、不甲斐なさ、それらと共に私は拠点からリストポーンされる。そうだ、スカーはホロパイロットの達人。

忘れて安直に行動するからこんなことに!!

反省と、実践でホロパイロットに会つた時の戦略として今の反省を覚える。

殺されたことに怒るあまり、それを忘れてしまつては、交流戦の意味が無い。

そこはしつかりと区別して、私はまた駆け出す。

すると次に現れたのは名も知らぬヴィンソンソンダイナミクスピパイロット。

そう言えばこちらは5人だが、ヴィンソンソンダイナミクスピパイロットは10人いたな。

ここまで酷いのになるとは思つてなかつたが…

さて、肝心のそのパイロットの動き……酷いものだ。

パイロットは壁を疾走できるが故に凶悪な速度で敵の意表をつける。

彼は地面を普通の歩兵のように走つていた、それもジャンプキットのアシストもなしに。

本当になつたばかりなんだなと思いつつ、私も昔はああだつたと懐かしむ。

だからこそ殺す、学んで強くなつてもらうために。

隙だらけな頭上に鉛玉をくれてやつた。

パーンと心地良い音とともにパイロットの脳天が弾ける。

【ニクマを殺害しました】

HUDにテロップが出て、彼をやつたことを証明される。

だが止まつてられない、また壁を走り出す。

動かないと死んでしまう、戦場は立ち止まつた奴から死ぬ。

それを嫌等いうほど見てきたし、実践もしてやつてきた。

こんなふうに、立ち止まつて狙撃に徹するパイロットの背面にな。マスティフの弾丸をぶち込む。

【ルフランを殺害しました】

「次!!」

そういき込んで走り出そうとした瞬間、体が飛んだ…

【B.B.に殺害されました】

「……どこからだあー!!」

対物ライフル【クレーバー】を貰つたのだろう。

いかにパイロットでも、そんなものを受ければ即死する。

見事に体を粉々にされ、私はリスボーンする訳だが、今回は本当にどうにもならない。

流石はとしか言えない、どこから撃たれたかさっぱり分からぬ。だが凹んでいられない、私はいつものように彼を呼び出す。

「ローニン!!」

『了承しました。パイロット』

私の呼び声につられ、ローニンが現れる。

当然このローニン、私の知つてるローニンではない。見た目だけ私のローニンなのだ。

流石にこの初心者交流戦で、固有戦闘^{アーティファクト}テータが沢山入った固有タイタンは、主に強すぎてまずいとのことらしい。

それで、全員見た目だけのタイタンに乗つていてまあ、例え私のローニン出なくとも、やるだけだ。ローニンに火を吹かせ、一気走り出す。

『悪いが、お前が一番厄介だからな筈。後で奢つてやる』

そんな声が一瞬聞こえる…

瞬間ローニンの脚部にダメージ大。

機体が大きく揺れ、体が揺さぶられる。

「この声…ブリストク!?」

なんてことだ…私の思考を絶望という文字が走る。

せつかくローニンを出して、さあ加速するぞという矢先に、なんとブリストクもタイタンであるリージョンを出していた…

私はブリストクにパイロットでも、ましてやタイタンでも勝てたことは無い。

あの男はなんというか…次元が違う。

そうなればやることは単純、逃げの一手だ。

リージョンは足が遅い、正面から戦うなど愚の骨頂。

ここは逃げて隙を窺う!!

フェーズダッシュとともに、私は狭い通路へと逃げ、同時に何度もブーストを吹かせて離脱する。

『……と来ると思つてたんだよ』

な、なんでだ!

私の目の前には既にリージョンがいた。

それもブリストクのだ。

『何年お前の戦い見てると思つてんだ……まだまだケツが青いな』
冷静に考えた、そうだ、私がどんな逃げ方するか、ブリストクは司令官としてずっと見てきた。

知らないわけがない。

私が【あの通路を通つて、この場所へ逃げること】を知つてゐるなら、
【足の遅いリージョンでも追いつける】。

先回りされたのだ。

ブーストは既に使い切り、逃げられない。

ソードブロックを使用して、迫るリージョンの弾幕を防ぎはする
が、ロックオン警報2つ。

『わりいなモップビー、演習でも勝ちたいわ!』

『ゴメン相棒……私も、私のおやつあげる』

ああ、そうだつたな。

BBはローニンのデータから私のくせが分かるし、一緒にコンビ組
んでよく戦つたカレルが知らないわけないよな!!

『『『1番強いやつは先に潰すと、士気をくじきやすいんで!』』』

3人の声が同時に響き、携行型追尾ミサイル【アーチャー】2つを
受け、ブロードソードをへし折られたローニン。

そこにブリストクのリージョンが迫り…プレデターキヤノンを大き
く振る。

1、2と鉄を碎く音と一緒に、世界が揺れ、収まれば赤く染まる砲
身。

「ああ……本当に、勝てないなあ…」

処刑【圧倒】、その名の通り、私はただその強さに圧倒された…

「皆して……何故だア!!」

若干やけ酒になりながら、私は叫ぶ。

あのあと集中的に、エイペックスプレーティーズのお馴染み面子に狙い打たれ、やりたい放題され、何も出来ないまま演習は終了。

どの道報酬は試合した時点で貰えるから、なんら問題ないのだが：このフラストレーションを吐き出さずにはいられなかつた。

「相棒、自由にすると危険すぎる…どんなことしても……止める」

それは私の強さを信用してくれるからだろうか。

カレルがそう言つて、私の背を撫でる。

銀の床まで届く長髪に赤の宝石の様な瞳、しかしそれより目立つ鋼の左腕と右足。

相変わらず可愛らしい容姿に似合わない義肢だが、機能性重視の本人は気にしない。

そんな彼女がそうは言つが、やはり腑に落ちない。

「せめて…せめてBB位は…ああ!!」

接近戦苦手と自称してるが、ナイフを使つた格闘は大得意なBB、しかし武器故によればマステイフの方が有利。

それ故に寄りたかつたが、寄る前に殺され、寄つても護衛にスカルカカレル、大穴ブリスク。

どうしろというのだ…

「まあまあ、モツピーによられたら死ぬし、そりやなあ…」

「寄れなきや殺られる、ショットガンの…哀しき運命…あうあう

「ぬああ!!今日は飲むぞア!!」

私は、自分の財布の中身など気にせず、久々に飲んだ。

途中意識が消え、何をしてたかわからんが、とにかく飲んだことは覚えていた。

だが、これもたまにはいいだろう。

私だつて、常に成功ばかりという訳では無いのだから…

ACT7 篠ノ之筈の1日

私、篠ノ之筈の朝は休日でも早い。

朝5時に起床し、顔を洗い、歯を磨き、うがいを済ませたら栄養ドリンクを片手に両手両足に重りをつけた状態で船内を20週走り、腕立て腹筋スクワットそれぞれ100回数十セツトを済ませ、シャワーを浴びたら朝食を作り、そして食べる。

そうしていれば時間はあつという間に8時になり、大半の奴らが起きてくる。

私達傭兵は、生活リズムがみんなバラバラだから、早く起きるやつもいれば遅い奴もいる。

私のように日々鍛える奴もいれば、何もしない奴もいるしな。

いい例がスカーとカレルだ。

スカーはだいたい私と同じ時間に起きてきて、私と同じメニューのトレーニングをする。

逆にカレルは休日ならば昼過ぎまで寝てる。

トレーニングもほとんどしない。

まあ左腕右足が義肢の彼女には、トレーニングはあまり必要ないのかもしれないが、残つた方はトレーニングした方がいいと思うのだから：

とと、それは置いておこう。

そうして朝食が終われば、次に私が向かうのはローニンのもとだ。基本ローニンはタイタン保管庫で、他のタイタンと共に収容されていて、稀にBBがメンテナンスか魔改造かしている。

きようは：魔改造のようだな。

油と硝煙の匂いがしみわたる倉庫で、マーヴィン達が忙しく弾薬や装甲板、塗装スプレーやりペアキットなどを手に持ち作業している。

その中で、BBは楽しそうに自身のタイタン、トーンこと【PH-5076（愛称ピ一娘）】に何やらとんでもないものを持たせていた。見た感じはブルートの4連装ミサイルランチャーのようだが、先端

に鉄杭が見えていて、先は銳利なものであつた。

直感的に私は感じた、あれは射出型4連装パイルバンカーだと。

弾薬費は安く火力はタイタンを一撃で戦闘不能に追いやるものだが、打ち出す杭が10～12メートル前後とそこまで飛ばない、弾速も遅いし本体が重い、ヴォーデックスシールドで返されると大惨事など、あまりにもピーキーすぎる故にお蔵入りとなつたIMCの試作兵器。

それをどこから仕入れたのかは知らないが、彼はそれを……私のローニンに積もうと…おい？

「何やつてるんだお前はまた!?」

「お、モッピーこれ付けちゃだめ？」

「ダメに決まってるだろ！ ローニンが重くなる!!」

軽装甲かつ、そこまで重いものを載せること想定していないローニンに、そんな重いのを載せたら重量過多で転倒する！

大慌てで私はBBに停止を呼びかける。

「いやーそこはブースター増設して、こう、吹っ飛ぶように加速させればー」

「私がGで死ぬだらうが!?」

タダでさえローニンの加速性能は、ソードコアを発動させると私はかなりキツいんだ。

その状態なのにさらに増設でもされたらソードコア時に死ぬ未来が見える。

「えー、それじゃあこれはどう？」

そう言つて、BBは非常に残念そうにトーンにパイルバンカーを置かせると、別のものを見せつけた。

それは刀だ、ブレードだ。

銳利で長く、だが軽量化を狙つてるのであらうか所々に穴が開けられて肉抜きされていた。

長さはブロードソードと同じくらいか、いや、ローニンのブロードソードをさらに銳利にすればあんな感じになるだらうか。

「もう一本つけて二刀流とか！」

そう嬉嬉として言つてくるBB。

なるほど二刀流か、それは悪くないかもしれない。

片手でガードしつつ、もう片手で攻撃とかも出来るようになるかも
しれない。

ソードコア時には手数も増えて、大火力をさらに叩きつけられるよ
うにもなる。

こつちは良いだろうか。

「そうだな、そつちは良いだろう」

そう言うとBBはそれじや早速といって、ローニンの背にあるハン
ガーを増設し始めた。

「あ、ついでにフェーズのリキヤスト時間を短縮して、効果時間伸ばし
ておくなー」

……おい？

なんか余計なことまで改造し始めてる気がするが、私の気の所為だ
ろうか。

氣の所為だと思いたいのだが。

『パイロット、心中察します』

ローニンの憐れむ声が聞こえたした。

タイタン保管庫でトラブルがあつたものの、ローニンと会つた私が
次にするのは昼食、それが終わつたら鍛錬だ。
と言つても、夕食までだがな。

夕食が出来るまでひたすら朝と同じように鍛錬を繰り返して、自身

の練度を上げておく。

こうしておくことで、戦場で不測の事態が起きても対処できるようになつていくというわけだ。

千里の道も一歩から、初めから天才などどこにもいなし：私の姉さんもそうだったのだろうか？

そんな懐かしい顔が浮かぶ中、鍛錬を終わらせて、次には夕食、それが終わればいつもの大仕事だ。

それはカレルの世話だ。

カレルは年齢だけ見ればまだ高校一年生だ。座学を教える必要がある。

と言つても私もB.B.に教えて貰つた口だからあまり偉そうに言えないが。

そうしてカレルの部屋に行き、扉を開ける。

ノックは必要ない、いつもこの時間には私が来るのを向こうも知っているからだ。

案の定カレルは勉強机の上に座つて、私を待つていた。

カレルは勉強が案外好きのようだ。

自身の見地を広めることは面白いと、前に言つてたような気がする。

「それじゃ始めるぞ、まずは前の数学の復習だな」

そう言つて早速私達は取り掛かつた。

カレルは勉強とか真面目なことは普通に受けれる良い奴だ。

戦闘にはヤク打つし、副作用のせいでの色々とボロボロになつてゐるが、そこを機械化で補つてゐる。

1番驚いたのは脳の半分を機械化していると聞いた時だな。

副作用で脳萎縮が酷く、まともに動くことも出来なくなり、喋ることすら困難になつた時もあつたらしい。

それでも機械化して戦いたいと思う心、カレルは何故そこまで戦いたいのだろうか。

5年間共に戦つてゐるが、分からることはまだあるものだ。

まあそういう分かるのもあれかもしれないが。

人というのは分かりにくいものがあると、私も学んだからな。

癪癪起こして木刀振り回していた頃が懐かしい。

絶対に戻りたくはないが……あ。

「この間はこれが答えだ、惜しかつたな」

ニアミスを指摘して、どうすればいいか考えさせる。

機械化してるからすぐ導き出そうとすれば出せるのだが、それじゃあ残された脳が活性化できない。

だから機械で解を出さないように指摘しながら、続きを教えていく。

しかし人に物を教えるというのは、案外楽しいな。

傭兵じやなかつたら、教師の道も悪くなかったかもしれない。

……と言つても、私自身BBに注意されて始めてまともな教え方ができるようになつた訳だが。

前は酷かつたな…擬音まみれだ。

よくあんな抽象的に教えようとできたな昔の私。

そんなこんなを考えながら、私は教えることを続投した。

途中、船内放送が鳴り出したが、それは私を呼ぶものだつたらしく。カレルの授業が終わつたらこいとの通達だつた。

放送者はブリストク、仕事の依頼だろうか？

今日は休暇だし、来たら来たらでどうしようか。

そんなことを考えながら、私は授業を進めるのであつた。

ブリストクに呼びたされた後、私は話を聞いた。

なんでも数日後、この辺りの海域でミリシアの大規模補給艦隊が

やつてくるらしい。

それを叩いてくれとのIMCからの依頼だ。

まあどうせIMCだ、途中で余計なことをしてくれそうな予感があるが、今日でないなら別にいい。

さて、カレルの授業が終わつたあとは、私は特にやることがない。鍛錬でもいいが、ローニンにまた会いたいな。

いくら鍛錬が大切でも、やりまくればいいという訳では無いしな。晩御飯も近いし、やはりローニンにあつてこようか。

そう思い、私は再び保管庫へ向かつた。

そうして保管庫へたどり着けば、BBはいなかつた。

既にローニンの魔改造を終えたようだ。

：本当にブレード以外付けられていなうだろうな？

不安になつたため、実際にローニンに聞いてみることにした。

「ローニン、BBに変なことされてないか？」

『いいえ。パイロット、彼は私を強化すれど弱体化をさせることはあります』

至極真つ当な返答が飛んでくる。

そういう意味じやないんだ、強化は強化でも、あいつの強化は狂化と言つてもいいからな。

しつかりと舐めるようにローニンを見つめる。

……うん、変にブースターが追加されたりしてないな。

「それならいいんだ、それなら」

ひとりボソリと呟いて、ローニンの側に体を寄せる。

硬く冷たい鉄の肌が、私にヒヤリと伝わる。

油と火薬の匂いがほんのりと漂うが、それさえも少し心地よい。

『パイロットの心拍数及び血圧低下、リラックス出来ていますか』

自分に触れることでリラックス出来たことが疑問なのだろうか、ローニンはそんなことを聞いてきた。

当然だ、5年も一緒に戦つた相棒だ、側にいて安心できないわけない。

私はローニンには絶対の信頼を置いてる。

性別どころか種族？さえも違うが、私はローニン以外に乗るつもりは毛頭なかつた。

彼の頭、つまりバツテリーア付近に座る。

それをローニンは特に抵抗することなく、むしろ落ちないように座らせてくれる。

タイタンにとつては弱点とも言つていいバツテリー挿入口、そこに座らせるということは、信頼されてるという証。

つまりローニンもまた私を信頼してくれていいんだ。

それを嬉しく思い、彼に会話を続ける。

「なあローニン、今日はな……」

そうしてローニンと話し続けることで、いつの間にか残った1日が過ぎていく。

これが私の一日だ。

決してまともな日々ではないし、殺し合いをしている時の方が時間の割合は多いが、それでも私にとつては掛け替えのない、愛しい時間だつた。

ACT8 赤い亡靈

名もなきデブリ多き宇宙空域、そこには現在ミリシアの大規模補給艦隊が集結しており、数多の船団に物資を補給していた。

ミリシア本拠点、惑星ハーモニーから持つてこられた物資は、前線の兵士たちを癒し、さらなる士気向上を施してくれる。

それ故に補給艦隊というのは大抵狙われやすく、護衛も凄まじい。特に補給が途切れれば絶滅必須のゲリラ組織なら尚更だ。補給艦1隻に4隻もの戦艦を付けさせ、さらにあるだけのタイタンを、宇宙戦用に換装させて出させていた。

これ程大規模な補給艦隊は、ミリシアでは類を見ない程だろう。それ故に次行われる作戦が、ミリシアにとつてどれほど重要な物語っていた。

「ここまで運んでくれて、ありがとうバーカー」

「困った時はお互い様だろ、一杯奢ってくれたらそれで十分さ」

エンジェルシティエリートリーダーのバーカーと、特攻兵团のサラブリックス司令が互いに手を取り合い語る。

この2人はデメテルの戦いの時よりの友人で、こうしてフロンティアのために戦っている。

今回補給艦隊を護衛している戦艦やタイタンも、エンジェルシティエリートより1部派遣されていたりする。

そして最終目的が同じこともあつてか、互いの兵士やパイロット達も仲が良く、こちらもこちらで手を取り合つてた。

そんな平穏に指す影、IMCはそこまで無能ではない。すぐさま全艦隊に響き渡る警報。

それは敵艦隊接近を知らせるものであつた。

「つち、完全に隠れてたと思つたんだがな」

「見つかつたものは仕方ないわ、皆迎撃体制！何としても補給艦隊を守るのよ！」

サラの一聲に、皆が大きな声で答える。

それは希望であり、折れぬ意思。

それぞれが己の持ち場へと走り、パイロットは相棒と共に宇宙へと飛び出した。

予想通りだなと、繋がった無線からブリスクが漏らした言葉が聞こえる。

現在私たちエイペックスプレデターズは、戦場より少し離れた位置に待機していた。

今回の作戦は実に単純だ、IMCの物量にものを言わせた戦法に疲弊した所を私たちが殲滅する。

ターゲットは補給艦とタイタンのみ。

戦艦撃沈でボーナスだが、あえて狙う必要は無い。

恐らく嫌でも沈めることになりそうだしな。

ミリシアにとつては生命線、最悪戦艦を盾にしてでも補給艦隊を守るだろうし。

さて現在の戦況だが…まあなんというか、ミリシアが若干優勢だ。相変わらず戦闘機にスペクターを乗せて戦わせてるせいか、デブリ内で戦闘がお粗末だ。

デブリに当たらぬことに注力しつつ攻撃してたため、速度が宇宙換装したタイタンより遅くなってしまってる。

本来ならタイタンを翻弄できるのだが…

それにミリシア自体も艦隊を守るため死ぬ気で対空砲火を行つてる。

まさに近づけるのかこれはと言つたところだが。

まあ近づかないとそもそも始まらない、しかしこれは私には幸運だつた。

デブリ群内の戦闘は大得意だからな。

むしろ宇宙ではデブリ群内以外では出来れば戦いたくないと思うほどだ。

それにローニン自身も、デブリ群内の戦闘は向いているしな。『おい筈、思ったより早く出番が来そうだ、携帯食は今のうちに食つておけ』

ブリストの言葉が聞こえる。

それに合わせるように私は手に持った携帯食を頬張る。相変わらず味が非常に薄いが、腹は間違なく膨れる。

戦闘中に空腹になつて集中出来ないなど、笑い話にされてしまうからな。

『パイロット、全装備の簡易点検を行いましたが、何一つ問題はありません。いつでも行けます』

ローニンも準備は万端のようだ。

私もヘルメットをしっかりと被り、密閉状態にする。

そうすればまるでベストタイミングとでも言いたげにブリストから連絡がきた。

『噂をすればだな、行つてこい！』

それは出番だということ。

ブリストの言葉に合わせてハッチが開いた。

眼前にローニンのモノアイ越しに見えるデブリと星空。

それを隠すように見える爆発の数。

あれのほとんどがミリシアではなくIMC側というのが呆れを通り越して笑えてしまう。

疲弊してからと言つてたが、これは本当に疲弊してるのかと言ったい。

まあそれはこの際どうでもいいか。

ローニンがカタパルトに固定される。

合わせてブースターを軽く吹かせる。

ゴウと聞こえた気がし、カタパルトが射出準備を始めた。

「等、ローニン、でるぞ！」

瞬間カタパルトが射出され、ローニンが宇宙空間へと放り出される。

即座に体制をブースターで整える。

慣れたものだ、初めての頃は回転するのが止まらなくて、ブリストク達に笑われたつけか。

今やデブリ群内限定なら、エイペックスプレデーターズ最強格ともなつたのにな…

「さて、始めるかローニン」

『ローニンソードをパイロットへ移行……戦闘を開始』

デブリ群内、補給艦隊を守る戦艦の1隻。

【タイ・ラステイモーサ】は現在最前線にて弾幕を貼り、補給艦隊へと敵を近付けぬ要塞と化していた。

名を頂いた英雄、ラステイモーサ大尉の生き様をまるで示すかのように。

その最後の防衛線は、戦闘開始から数時間が経過しているにも関わらず、何一つ通らせていなかつた。

「ここが最終防衛線なんだぞ気張れ！左翼、弾幕が薄いぞ！もつと張るんだ!!」

艦長【ガス・タービン中佐】の指示の元、【タイ・ラステイモーサ】

は強固な壁とかしていた。

これを突破できるものなどいるのか。

誰もが疑わない、だからこそ後ろを気にせず前に向かってIMCを減らせる。

ここが墮ちるのは、士気をくじくことになる。

それをよく知っているからこそ、タービン中佐は補給艦隊を護るのと、自艦を守るのに全力を尽くしていた。

「索敵どうだ、まだ近づいてくるのはいるか！」

レーダーをフル活動させて、当たりを見張り続ける。

それに答えるように、レーダー兵が声を上げる。

「スペクターの乗った戦闘機が山のようにまだ来ます！」

「ならひたすら叩き落とせ！いいか、ラインを越させるな!!」

彼の言葉に皆が頷き、それぞれ自身が出来る最大限を發揮する。

フロンティアの明日のため、自由のために。

何としてもこの補給艦隊を守り抜くために。

その為に命を投げ出しても惜しくはなかつた。

そんな彼らにひとつ凶報が入つてしまつた。

レーダー兵の1人がそれを見つけた時は、そんな恐ろしいものでは無いと思つたが。

「……ん？艦長！前方より謎の反応…しかしこれは」「あ、どうしたはつきり言え！」

「前方より凄まじく速度で接近する機影あり！しかしこれはデブリ群内で出していい速度ではありません、通常の5倍ほどです！」

「嘘だ、レーダーが故障したんじゃないのか！まだデブリ群内だぞ！」兵士のひとりが声を荒らげるが、それは当然だ。

その言葉がどれほど頭のおかしいことか分かるだろうか。衝突すれば死しかないデブリ群内を、通常航行の5倍の速度で突つ切る。

さらに戦闘中で弾幕まで張られている【タイ・ラステイモーサ】へとだ。

正気の沙汰ではなかつたが、タービン中佐だけは反応が違つた。

「おい待て……そいつの機動をよく見せろ!!」

彼の慌てた声に少しの不安を感じるレーダー兵、しかし上官に見せろと言わせて見せない訳には行かず、彼はそれをブリッジ内に展開した。

その機動は明らかにおかしかった。

ジグザグに、不規則に、しかし確実に恐ろしい速度でこちらに向かう機影が1つ。

その不規則な動きに、タービン中佐は覚えがあつた。
それを思い出してしまった。

それは2年前の【デメテルの戦い】の時に見た機影。

当時まだ軍曹だった自分が乗つてた船を沈めた機影と同じもの。奇跡的な生還時のトラウマがフラツシユバックし、そんな馬鹿な、最悪だと彼を恐れられる。

「ぼ、亡靈!?」「赤い亡靈】だ…！」

「【赤い亡靈】つて、エイペックスプレデターズのあの!?」

その2つ名に、兵士がざわめきを隠せない。

恐ろしいその強さは、ミリシアの兵士なら誰もが知っていたからだ。

「【タイフォンの戦い】でのタイタン10機斬りが1番有名だが…俺は知ってる、体験してる!【デメテルの戦い】でも、あいつはデブリ群内で戦艦を何隻も沈めた怪物だと!」

彼らが恐怖に支配されている間にも、【亡靈】は接近している。

ついには肉眼で見えた、その機影。

デブリの影から、まさに亡靈のごとくゆらりと、レイスのノーズアートが刻まれたローニンの姿が。

「うて！撃てえ!!アイツを撃てえ!!ぜ、絶対にここを突破させるな、あれに突破されたら補給艦隊が!!」

艦長の言葉を待たずに、兵士達は既に亡靈に砲火を向けていた。

無数の弾丸が飛び交い、亡靈を破壊するためだけに打ち出され続ける。

しかし亡靈はそれを嘲笑うかのように、デブリへと姿を消しては現

れる。

赤いジラフ迷彩が目立つはずなのに、まるで消えるように。

「レーダーから消えました！・フェーズです！」

ついには亡靈は本当にこの世界から消えた。

すなわちそれはフェーズダッシュで十分近づける程まで来たといふことで…

「イカン!? 各員索敵を……あつ!?

彼の言葉はそこで止まってしまった。

彼の目には写つてしまつた。

無数の砲火をくぐり抜けてたどり着いた亡靈、その刃が、自身のいるブリッジへと振り下ろそうと、フェーズ終了の白霧を纏いながら現れた姿を。

「そ、総員退……！」

そこから彼の言葉が続くことは無かつた。

次に彼が見たのは、真つ赤に飛び散る自身の肉体だったので、それが彼の見た最後の光景だつた。

戦艦のブリッジを潰し、真空空間へと放り出されていくミリシア兵士を横目に、私は船のワープドライブシステムが収容されている区画へと飛翔する。

しかしその方法は私特有のもの。

というか私からしたら何故皆しないのか不思議なんだが。

それは簡単で、デブリ群内でしか使えない方法。

デブリを足場にしてジャンプするように移動する。

こうすることで推進剤を節約しつつ、加速もできるし、デブリ衝突もそこまで考えなくて良くなる。

わざわざ衝突しに行くようなものだからな。

デブリを足場にポンポンと行くことで、不規則な軌道になり、デブリがさらに障害物にもなってくれるおかげで弾丸も回避しやすくなる。

軽量級の宇宙戦換装なら誰もが出来そうなんだが……何故皆しないのだろうか。

それとも、デブリは回避するものと、常識に捕らわれているのだろうか。

もしかしたら、だからこそ引っかかるのだろうな。

奇襲強襲は、常識破りだからこそ通用するのだから。

そうして砲火を苦もなくかいくぐり、ワープドライブシステムがあると思われる区画へとたどり着いたならやることは単純だ。ローニンソードを手に持ち一気に接近。

その区画へと突き立て、何度も刺突する。

さすがに戦艦のサイズを一刀のもとに切り捨てるなんて出来ない。的確に急所へと、致命的な攻撃を繰り返すだけだ。

蓄積した損壊は、やがては修復不可能なダメージになり、崩壊へと導く。

突き刺すこと数十回、嫌な眩い光が船内から溢れ出す。確認したなら一気に離れて防衛線を突破する。

それに合わせて船が内部から派手に爆散して、青色の炎を辺りに見せつけた。

うむ、やはりこの方法が1番スマートかつ楽に戦艦を沈められるな。

まあ寄ることが出来ればな訳だが……

ワープドライブシステムは、宇宙空域を何億光年もワープして飛ぶことが出来るシステム、故にそのエネルギーは膨大で、それを攻撃し

て刺激してしまえばあとは勝手に崩壊して爆散する。

まあローニンソードのように接近して突き立てるとかできない限り、そろそろダメージが行かないよう、ワープドライブシステム周りの装甲は強固、故に射撃で壊そうとするには時間がかかるし、何より戦利品が取りずらくなるからあまり好まれない。

私のように敵を排除することしか考えてない者以外は基本ブリッジを潰した後、対空を無力化して終わりだな。

『パイロット、敵タイタン及び補給艦隊コンタクト』

ローニンの知らせが飛ぶ。

視線を再度向ければ確かにそこにはノーススターとブルートの2機。

さらに奥には補給艦隊がズラリと見えた。

目的が見えたならそこまで行くだけだな。

私はローニンのブースターを点火して、一気に接近。

あのタイタンは後回し、あくまでメインは補給艦隊の殲滅。タイタンもメインとはいえ、集中しすぎると艦隊に逃げられるからな。

『くそ、まだ物資は全部渡せてないのに!』

『亡靈 め! 絶対に先には行かさん!!』

しかしそう簡単に進ませてはくれない。

ノーススターのレールガンとブルートの四連装ロケットランチャーが、ガンガン撃たれる。

デブリを活かして回避出来るのはいえ、限度がある。

このまま後ろから撃たれ続けているのはまずいな。
ならこうしようか!

ローニンに指示を送り、次のデブリに到着と同時にデブリを思いつきり蹴り飛ばす。

その蹴り飛ばす方向はいつも進行方向の逆向きだが、今回は敵タイタンに向けて蹴り飛ばした。

おかげで少し標的から離れてしまつたが、この索はうまくいつたようだ。

突然飛んできたデブリに対処できず、ノーススターが直撃。

宇宙空域故に、速度をそのままに大質量の塊が軽量級にぶち当たればどうなるかなんて分かり切つたことだ。

『なつ!』

『スマス!!』

デブリがノーススターのコックピットをひしやげて突き刺さる。あれは即死だな、的確なスナイパーが減つたおかげでさらに楽に進むことが出来る。

ロケットランチャーを掻い潜り、補給艦隊の懷へ。

どうやら船の燃料を譲渡しての途中みたいだな。

ならやることは一つ、その譲渡ポンプにレッドウォールをぶち込み着火。

燃料から豪炎が巻き上がり、補給艦も繋がってた戦艦も共に爆散。んん、どうやら補給艦隊の積んでいるのは弾薬と燃料が多いみたいだ。

1隻の爆発に巻き込まれて次々と炸裂誘爆を繰り返していってる。いくらミリシアと言つても地盤は宇宙海賊、IMCのような宇宙戦闘本業みたいな奴らとは違い、艦隊の並び方が杜撰だ。

最近マシになつたとはいえ、それでも今回はつめつめにしていた。

それがこの大惨事の引き金だろう。

さて、ターゲットも沈めた、あとはIMCが何とかするだろう。これ以上やつてもタダ働きと変わりない。

ミリシアのタイタン数など数か知れてるしな。

そうして私は、宇宙の塵となつていくミリシア補給艦隊を横目に去つていった。

あの後、IMCがやらかしてくれた。

ミリシアの艦隊は、逆に潰された補給艦隊に積まれてただけの分の物資を、IMC艦隊を潰して手に入れるという荒業を見せて撤退。作戦は成功したのに、痛手をおつたのはこつちという訳の分からない事態ができた。

「ミリシアの依頼を受けるかどうか真剣に考えるかあ？」

ブリストクが胃薬片手にそんなことを呟いてる。

分からなくもないが、ここまで散々やつてミリシアが依頼を出してくれるか不安だがな。

どのみち、ミリシアが大きな作戦を企んでいて、それを事前に潰せたのは大きい気がするが。

「なにか……嫌な予感がするんだよなあ」

ひとり、虚空へと私は呟いた…

ACT9 ブリーフィング

あの補給作戦迎撃戦から数日後、惑星【アルデメス】にて私達はIMCの連中とブリーフィングを行つていた。

なんでも、ミリシアによる大攻勢が近々行われるそうだ。
あの補給作戦はその大攻勢のための補給で、潰された場合の予備の補給を受け取つていたらしい。

そして、その大攻勢を受ける場所がここ【アルデメス】。
デメテルに並ぶレベルのIMC惑星間中継拠点があり、残存艦隊の唯一の生命線とも言われてる場所だ。

ここが潰されたら、さらにIMC補給線に大打撃は与えられ、ミリシアへの攻勢が厳しくなる。

何としてもここを守り抜きたいというのがIMC側。

防衛設備は十分であるが、それを突破してくるのがミリシアの恐ろしいところ。

タイフォンでは突破不可能だろうと思われていたアーヴ運搬所の防衛を、いくつかのタイタンに突破されたし。

私は出会わなかつたが、中でもあるヴァンガード級タイタンの動きは凄まじく、エイペックス・フレーダーズ当時私達のエースであつたバイパー や、スカーの同僚のスローンがやられたのもそいつだとか。

会つてたら死んでいたかも知れないな：

バイパーは今の私でも勝てるかわからない凄腕パイロットだつた。
同じ軽量級使いとして、私の憧れでもあつた。

そんな彼が墮とされたと聞いた時は、何かの冗談かと皆で困惑したのも覚えている。

しかも彼の独壇場である空の上でだ。

流石にあの時はブリスクも、鳩が豆鉄砲を受けたような顔になつていたな。

なんせブリスクと肩を並べたのはバイパーだけだつたのだから。
：何故がバイパーのことばかり考えてしまつたな。

あの時のショックから立ち直れてないのかもしれない。

さて、気を取り直して作戦の概要だ。

大攻勢を仕掛けてくると言つても、細かい内容まではわからない。
しかしこの基地は立地場の欠点に、在来生物が大量にいることがある。

それが基地を荒らさないように、特殊な電磁波を飛ばす塔を立ててるのだが、おそらくそれを狙つてくるだろうとよんではいる。
よつて今回の作戦は、その塔を護衛することになった。

勿論防衛が目的故に、私達も最初から出撃することが決定してる。
今回は守り抜けた時のみ報酬を払うことだ。

それだけこの基地の防衛は重要も言うことでもあつた。

塔は3つあり、どれかひとつでも欠ければ大惨事。

私はその中の東側、その最終防衛ラインを担当することになった。
勿論カレルも一緒だ。

口には出さないが、カレルのことはローニンと同じくらい信頼しているからな。

相棒と言つても差し支えないかも知れない。

年こそ少し離れた姉妹レベルで離れてるが。

：姉妹か……

姉さん、元気にしてるだろうか…

：いかんいかん、今までの依頼で三本指に入るほどの大仕事だ。
ぼーと別のことを考えている場合ではないな。
集中しなければ。

そうして私は自身の意識をゆっくりと落ち着けた。
ミリシアの作戦開始まで三日前の出来事……

「みんな、よく聞いて。ついにIMCの大規模惑星間中継拠点が判明したわ」

ミリシア本拠ハーモニー、その大会議室にて多くの兵士たちが真剣に話を聞いていた。

その場を取り仕切るのはサラブリックス司令、傍に6—4のゲイツやエンジエルシティエリートのバークーなど、そうそうたる面々が集まっている。

それもそのはず、ここで話される作戦は、ミリシア大攻勢の足がかりになるかも知れない作戦だからだ。

「エデンで賞金稼ぎに見せかけた情報収取で得た情報と、この前の補給作戦襲撃地点から割り出した座標を合わせ、奴らの拠点はここ、【惑星アルメデス】だと分かったの」

「そんで攻める方法だが、俺が見つけてきた」

そう言つて、バークーが情報を全兵士達が座る座席のHUDにアップする。

それは特殊な電磁波を発生させる塔が3つ、赤色でマーキングされた基地の地図であった。

「この施設は前にお前らが潰した施設とおなじ、在来生物を寄せ付けてないようタワーで電磁波を飛ばすタイプだ。タワーを潰せばあとは在来生物がしつちやかめつちやかしてくれる訳だが：あの時と違うのは、それは相手も分かつてることだ」

そう言つて、1杯酒を煽るバークー。

真面目な会議の席で飲むのもあれだが、これが彼だから仕方ない。

それは置いとき、彼は続けた。

「何より奴らにはエイペックスプレデーターズがいる。IMCも必死なのか、フルメンバーを雇いやがった。これまでの数だけのパイロット達と違つて、奴らは本物だ。怪物と言つてもいい。だがやるしかないと」

い

バークーの言葉に兵士たちは頷く。

流石にどの塔にどの傭兵が着くまではわからなかつたようだが、それは仕方ないと皆声を上げる。

むしろ良くやつてくれたと。

「いい? この作戦はミリシアの今後の運命を左右するかもしれない。大攻勢に出れるか、それとも疲弊して消えていくか。一世一代の大博打にも近いわ。それでも、私たちにはIMCと違つて時間と資源が無い。無限に補給が続くIMCの補給路にトドメを指すのよ!」

司令の言葉に兵士たちが奮起する。

士気健旺、皆が勝利を願つての咆哮が響き渡る。

「よっしゃあ、じゃあ前祝いと行こうぜえ!」

「バークー、あなたが飲みたいだけじゃないの?」

最後のバークーで笑いが生まれるが、それはそれでいいのかもしれない。

ミリシア大攻勢まで三日前の出来事……

A C T 1 0 エンジエルダンス【あるミリシアパイロット視点】

惑星アルメデス上空、そこにはかつてないほどのミリシア艦隊が集い、これから行われる攻勢がどれだけ大きいか物語つていた。

下手をすると空を埋め尽くすほどであり、もしかしたらミリシアの総力やもしれない。

IMC惑星間中継拠点戦、デメテルやタイフォンに並ぶ大決戦になる未来は誰にでも想像出来た。

俺も相棒のヴァンガード級のコックピットの中で、指示が出るのを待っている。

遺書もちやつかり書いてたりする。

正直生き残れる気がしなかつたからだ。

これから起ることは歴史に残る、俺の名前は多分乗らないだろうけど。

そうしてくだらないことを考えていると、ブリックス司令の声が全艦隊に通達される。

『各員準備はいい？この戦いに勝つことが出来れば、IMC残存艦隊の息の根を止めることが出来る。雲の上と思われていた勝利が間近に迫るのよ！』

その言葉に、俺も含め多くの兵士たちが頷き、作業しながらも聞き込む。

『この戦いで私が出す命令は一つだけ、「必ず生きて勝つこと】以上！』

そう言い終われば音声が切り替わり、今俺を乗せてくれてる【ラストリゾート】所属艦の艦橋へ通信が繋がる。

ここにリーダー達はおちやらけているが、実力は確か。

彼らも今回出陣するとの事だ。

俺が担当するのは東塔・彼らは西と北を担当するようだから、援護は期待できそうにないが。

「よーしお前ら、スリルと冒険の準備はいいかあ!!」

「そのセリフこの状況でも言わなきゃ気が済まないか？」

2人の声が聞こえてくる。

それに合わせてマークイン達がタイタンから離れていく。

降下がはじまるということだ。

俺は確りとコックピットが閉じていることを確認した後、これからはじまる降下への衝撃に備えた。

「当たり前だよドロズ、さあ行こうぜ」

「はいはい、よーし全てよし！」

タイタンが武装をロックする。

姿勢が降下体制に入る。

『各員、タイタンフォールスタンバイ!!』
ブリックス司令の声が響く。

瞬間世界が揺れる。

ガコンと音が響き、物凄いスピードで地上が迫ってくる。
普通は恐怖を感じるべきだろうが、それ以上に俺達は恐怖を感じるものを見つけていた。

『マルスがやられた!!』

『なんだこの対空砲の嵐は!?』

『おいこれ降りられるのかよ?!』

そう、対空砲だ。

普通大気圏外から突入してくるタイタン相手に対空砲なんて意味
が無い。

設置場所を検知されたらそのまま軸をずらせられるからだ。

だがIMCは対空砲を設置する、その資源にものを言わせて。

デメテルの時も、タイフォンの時もそうだったが、やはりやばい。

既に地上に着く前に何機かのタイタンがやられたようだ。

俺の眼前にもいくつか掠めてくものがある。

さらに地上に近づけば今度は対空砲に混ざってプレデターキャノンが牙を向いてくる。

空中制御を誤れば即座に蜂の巣お陀仏だ。

俺の背筋に汗が伝う。

この時点で死んでもおかしくない。

悪運が強いのか地上まであと少しだが、正直きつい。

仲間のやられる悲鳴が聞こえてくる。

少し視線をそらせば、すぐ側の味方タイタンの上半身が消し飛ぶ様を見ることが出来た。

それでも俺は運がいいらしい。

結果的に爆散することなく着地でき、俺と同じ奴らが到着と同時に遮蔽物へ身を隠す。

「各員散開、目標へ侵攻せよ！」

「合図で行くぞ、いいな？」

一斉に飛び出せるように、皆がそれぞれ準備を整える。

飛び出せばリージョンのプレデターがお待ちという訳だから、タイミングは重要だ。

弾切れのタイミングを見計らい、切れる。

その瞬間に各員一斉に飛び出した。

鉄火が飛び散り、タイタン同士の砲火が口火を切る。

鉄と鉄が抉り合い、互いを消し飛ばしていく。

それでも止まる訳には行かない。

ヴォーデックスシールドを展開しつつ走る。

エネルギーが切れたなら直感で銃弾を避ける。

「うおおおおおお!!」

咆哮とともにロケット・サルヴォをリージョンにぶち込んでいく。くらつて怯んだリージョンの土手つ腹に蹴りをかまし、怯んだそこにサルヴォとX016を叩き込む！

ズガガガガツと軽快な音とともにリージョンの上半身が穴まみれになり、ついに砲火網に穴がひとつ開く。

それに合わせるように他の仲間たちも次々とリージョンの戦線をくぐり抜けていく。

よし、これなら行けるはずだ。

走る仲間を他所目に、俺も目標の東塔へ向かつて走り出す。

途中IMCの防衛タイタンが顔を見せるが、ミリシアのチームプ

レーに次々と打ち倒されていく。

大半のタイタンが中身のないオートタイタンだからだろう、ここまで上手くいくのは。

順調とも言える速度で、最終防衛ライン。

あと少しで俺たちの勝ちが見えた時だった。

『敵タイタン補足……つ!? エイペックスの【焦土の死神】だ!!』

その叫びと同時に、通信を入れたヴァンガード級の持つ~~x~~016が

爆発した。

どうやらテルミットランチャーの直撃を受けたしく、中にあつた火薬に引火したのだろう。

その衝撃で怯んだ彼にトドメを指すように、一体の赤い影。

コツクピットハッチを貫通するブロードソード。

吹き出る鮮血で赤く染まる機体。

それは誰もが知ってるエイペックスプレデターズの2大エース。

『赤い亡靈』だ！ 奴もいるぞ!!

「こつちは大当たりかよ……くそ!!」

こちとら名前二つ名なんてない一般パイロットなのに、とんでもないものに当たつてしまつたと、後悔を表すのだった。

A C T 1 1 エンジエルダンス

ミリシアの大攻勢が始まつた。

空から今まで見たこともないような大量のタイタンが降り注いでくる。

ミリシアには物資が少ないと聞いているが、これを見たらどこにこれだけのを隠していたんだと問いただしたい。

しかし黙つてみてるIMCではない。

おぞましい数の対空砲が火を吹いて、合わせてリージョンのプレデター・キヤノンも轟音を鳴らす。

耳がおかしくなりそうな爆音が辺り一体を支配する。

それでもただやられるミリシアじやあない。

空中で姿勢を取り直して回避を試み、助かつたものが次々と着陸しへくる。

その数およそ数千。

レーダーが真っ赤に染め上げられている。

『パイロット、そろそろ我々の出番のようです』

ローニンが私に告げる。

ああ、それもそうだろう。

数こそこの数千倍いるIMCタイタンだが、中身のないオートタイタンばかり。

数多の戦場を潜り抜けてきた兵士たちに比べれば月とすっぽん。数は減らせるが、そこそこ程度だ。

『等いく、まだしちゃダメえ？』

カレルの甘つたるい声が無線越しに聞こえる。

相当キメたいようだが、まだトリップしてもらうと困る。
せめて敵タイタンを一機落としてからでないと。

私たちはあくまで最終防衛ラインの護衛。

守りきれなければ報酬がパー。

なんとしても守り抜くため、戦線から離れるわけにはいかない。
ここはまだ待ちなんだ。

ふと思ひだし、コツクピットのそばにあつたマステイフを手に取る。

そういえばこいつを手に持つたのも、こういう防衛戦の時だつたな。

ないとは思うが、仮にローニンがやられて脱出した場合、私は白兵戦の援護に回ることになる。

その時ようすに弾がしつかり入つてることを確認する。

よし、全弾入つてる。

ジャカツと軽快な音をたてて、マステイフがコツクピットの銃床に収納される。

それと同時だつた。

『こちら東側第六防衛ライン、ダメです！持ちません!!最終防衛ラインの皆さん準備を…ギヤアアアアア!?』

爆発音と人が焼ける音共に無線が切れる。

ついに来たようだ。

ニューラルリンク越しにローニンの興奮が伝わる。

人の事は言えないと、少しは落ち着いてほしいものだ。

まあそういう私も、はやく敵を切り伏せたくて仕方ないと右腕が疼いているが。

カレルもカレルで準備万端だ、無線越しに注射器を取り出す音が聞こえた。

そうお互ひの準備が完了したと同時だつた。

即興で作られたコンクリート防壁が粉々に吹き飛び、何体かのヴァンガード級タイタンが姿を見せた。

瞬間私たちはそれぞれの行動をとつた。

カレルがテルミットランチャーを撃ち、敵銃が爆散し、その目眩ましに紛れて私がそのがら空きのコツクピットをブロードソードで刺し貫いた。

鉄がひしやげ、肉が粉碎される音が聞こえた。

吹き出す血を浴びて、ローニンが赤く染まる。

それが、開戦の狼煙となつた。

始まつてからはそれはもう激戦といつて良い。

隙を見せればロケットサルヴォが飛び交い、チエーンガンを撃ちまくられる。

ヴォーデックスシールドに守られ、ヴァンガードは削られもしない。

さすがに電池三本も使つてゐるだけある。

予算度外視で製作されたヴァンガード級タイタンは、バッテリービー本も使用する大飯食らいだが、その分性能は破格の品。

少数精銳のS R Sに相応しいタイタンと言つたところだが、切り伏せさせてもらう！

フェーズダッシュとソードブロックをうまく使い合わせて、限界ギリギリまで近づく。

近づいたならブロードソードで両断する。
離れてるならレッドオールで蜂の巣だ。

ローニンの足が地面を踏み抜き、泥と硝煙が舞い上がる。

私を倒そうと伸ばす拳が宙を切り、そこへカウンターとソードを突き立てる。

突き刺し殺したタイタンを盾にして、そのまま突つ込む。

回避しようとするタイタンへと盾にした奴を蹴り抜き、ぶち当たり

怯むそいつへレッドウォールを密着させ引き金を引く。

散弾がハッチをぶち抜き、中身をグロテスクな仇花へと変える。

あくまで私の想像ではあるが、遠からずともいえるだろう。切り伏せ撃ち抜き次へ次へ。

ローニンが剣を振るえば、三体のタイタンの胴が宙に舞う。ソードコアを発動させればその倍、いや倍々。ハイランダーが猛威を奮つて、右へ左へ推して参る。

かつてここまでタイタンを切り伏せたことがあつたろうか、いやない。

目に映るだけでも10は軽く捻つてしまつた。

だが、彼らが弱いんじやない。

私とローニンの絆の方が少しばかり強いだけだ。

死ぬかもしないと言うこのギリギリで、それはさらに強く感じる。

ニューラルリンク以上に、私たちは使い繋がりを今感じていた。

ローニンが哭いている。

もつと斬らせてくれと哭いている。
もつと強い敵を斬りたいと慟哭する!!

「次い！次はいないのかあ!!」

無意識に、私も吠えながらローニンにイメージを送らせる。

敵をなぎ倒すイメージを、次々と休む間もなく。

正直なところやり過ぎて吐き気がしてきてるが、泣き言は言えない。

IMCが今までしてきたことを、今度はミリシアがやつてるだけの事。

この程度で根を上げては、切り伏せたミリシア兵士に申し訳がたたない！

そう思つてるのは私だけではないようで、カレルも猛威を奮つていた。

【焦土の死神】、二つ名に相応しい姿を焼き付けていた。
辺り一帯全てがテルミットに包まれていて、カレルのスコーチ以外は溶解していた。

おそらくフレイムコアを乱発したんだろう。

敵が密集して小さな入り口からやつて来るものだから、スコーチの独壇場だ。

一体焼き殺せばなん十体と巻き添えをくつて蒸発する。

地獄の業火とはこの事を言うのだろう。

死神のノーズアートがおぞましく照らされる。

『入れ食い、入れ食い……イッヒヒヒヒ！』

声が聞こえればまたフレイムコアが打ち出され、並んでいた三体が無惨にも溶けて消える。

カレルのスコーチが煤まみれになつて行くのに合わせて、私のローニンも返り血で真っ赤に染まつていく。

凝固が始まつて、黒く染まつてる場所もあるな。

だがそれを気にし続けていられない。

次を、次をと斬つて斬つて切り伏せて。

そんなときだつた。

一体のタイタンフォール検知、それはハーベスター級二体。

一体はカレルの元に、もう一体は私の方に。

そうして降つてきたタイタンを見て私は直感した。

こいつは、^{エー}_ス撃墜王だ。

ハーベスター級タイタン【モナーク】は戦地での生存を目的として作られたタイタン。

生き残れば生き残るほど強くなる。

そんなモナークをこの戦況下に初期レベルで送り込むやつはいない。

となれば敵対するこいつらはレベル3。モナークの最高レベル。

私が対峙しているのはおそらくロケットサルヴォ特化のモナーク。カレルはアクセラレータ特化のモナーク。どちらも相性最悪だ。

だがそれが良い。

それでいい！

「ローニン」

『勿論です、最後の時まで』

ソードコアが発動する。

合わせてモナークから追尾ロケットサルヴォが火を吹く。
フェーズダッシュでそれを避けて、一気に接近。

世界が白黒からカラフルへと戻り、眼前にモナーク。

「勝負！」

いざ吠えて一合目。

降り下ろしに対してモナーク、銃器を盾にし防ぐ。

XO-16がたたつ切られるが、反撃とばかりに拳を打ち出す。
隙だらけのローニンに拳が刺さり、コツクピットが揺さぶられる。
だが怯まない。

二合目、横風ぎ一線。

左腕を犠牲に脇へとブロードソードを固定された。

一步間違えれば両断と言うのに、凄まじい判断と精密さだ。

帶電したブロードソードによって、斬られてなくともダメージがモ
ナークへと入っていく。

それでも怯まずモナーク二打目。

今度はハツチがひしゃげて、ニューラルリンクの視界が切れて私の
生の視界に切り替わった。

それでもまだ吠えてやる。

三合目！隠し持ったBBが持たせたもう一本のブロードソードを
モナークのコツクピットへと突き立てた。

ギヤリイと音をたてて、モナークのコツクピットが貫かれる。

『お…見事…………だが一人で死なぬ！』

鮮血が私のヘルメットに浴びる。

それと同時に閃光がモナークから溢れで始めた。

ニュークリアイジエクト！？

辺り一帯を更地に変える、タイタン最後の切り札。

急いで離れようとするが、ガツチリと抱き抱えられてしまい離れら
れない上に、イジエクト機構を押さえつけられてしまい脱出もできな
い。

敵パイロット執念の自爆のことだ。

冗談じゃない、私もローニンも、ここで死ねない！

死ぬわけにはいかない。

私は、まだ、思いを告げてない人がいるんだ。

死ねない、死ねない！

だけれど逃げれない。

「ローニン！」

『パイロット!!』

お互いの名前を呼ぶのは同時だつた。

私はとつさにローニンのコアを取り外し抱き抱えた。

奇跡など起こりはしないとわかつていながらも。

フェーズダッシュの指示を空のタイタンに送る。

この状況下でのフェーズダッシュは敵タイタンの位置にフェーズする危険があり、絶対してはいけないのだが……かのなら一にかけてやる！

閃光が輝きをさらに増していく。

フェーズダッシュが間に合わない！

一夏！

ACT12 帰還

閃光、熱、白黒。

全部が全部ぐちやぐちやにねじ曲がつて気分が悪い。

視界がぐるぐる回つて世界が歪む。

あの後私はどうなつたのだろうか。

ニュークリアから逃れるために、フェーズダッシュを使用して。

ここは地獄だろうか。

もしかしたらフェーズ事故によつてつぶれてしまつたのかもしれないし。

ほぼ自殺行為に近い行動だつたから、それも納得行くと言うものだ。

でもそうだとしたら、私は思い残したことがたくさんある。

まだ一夏に思いを伝えていないし、ローニンだつて巻き込んでしまつた。

姉さんだつて心配してるだろし、まだ謝れてもいい。

ああ、こうしてみると、本当にやり残したことばかりなんだなど。

そんなことに涙を流しながら、私はヘルメットを脱ぎ捨てて大の字になつて倒れていた。

ああ、視界が晴れてきた。

歪んだ思考もだんだん戻ってきた。

白黒の世界がカラフルになつて、視界一杯に広がる青が清々しくて、鼻腔に土と草の香りが……

ちよつと待て、青空？

戦火で濁り曇つたはずの空が青い？

おかしいと思つた私は体を起こし、辺りを見回す。

そこは見したことない場所だつた。

いや、記憶のすみに引っ掛かるものがある。

しかしそれのわけがないと知つている。

まさかそんなはすが、そう考えて辺りを見ると、カレルがうつ伏せに倒れていた。

安否を確認するため、体を起こしてメットをとる。

：うん、呼吸も安定していて外傷もなし。

一体何があつたんだ、私たちに。

混乱する私たちを差し置いて、世界はさらに回つて行く。

突如今度は空がピカリと光輝いた、と思つたら空からなにか降つてきた。

タイタンか？

警戒を強めて、意識をまだ失つてるカレルを抱き抱え下がる。

腰に手を伸ばす、ローニンのコアといざというときのスマートピストルがあつた。

スマートピストルを構え、降つてくるものに警戒を強める。

しばらくしてそれは爆音と共に着地した。

それは…ニンジン？

警戒するとメタリックな質感を放つ巨大ニンジンが開いた。

そうして、中から出てきた人物を見て、私は驚きを隠せなかつた。

「篝ちゃん!!」

「ね、姉さん!?」

あの後、姉さんに色々説明してもらつてあの場所を思い出した。
あの場所はIS学園と呼ばれる、ISを操縦するものたちを育てる

ための施設で、何故か急に私たちが校庭に出現したとのことらしい。幸いまだ学校側にばれてないようなので、姉さんが回収しに来たと言うことだ。

今は姉さんが持ってきた小型輸送挺に乗せてもらいながら話を聞いていた。

「本当に、死んじゃつたかと思つてたよ篠ちゃん!!」

「その節は心配かけてごめん、姉さん」

ワンワン泣きながら私に色々話していく姉さん。

どれだけの心配をかけたか教えてくれた。

なんでも、こつちだと数十ヶ月の時間がたつてるらしい。

逆に言うと私が今までいた世界と時間のズレがあるから、私は20才なのに、一夏は16才と言うことだ。

姉さんとの年齢差も大分縮まってしまった。

複雑な心境だ、一夏にどんな顔して会えば良いのだろうか。

「そうそう、篠ちゃん。ひとつニュース!」

そんな考えているとき、姉さんがなにか言い出した。

ふと思つた私は耳を傾ける。

すると吹つ飛ぶほどの衝撃を受けることになつた。

「いくくんがIS動かしちやつて、来年度ISに入ることになつたよ！」

A C T 1 3 エンジエルダンス【カール視点】

どくんどくんて心臓が鼓動を行う。

バスンバスンてランチャーの引き金を引く。

紅蓮の焰が敵を焼く。

燃え盛るテルミットに、人やタイタンが形を変えて黒くなつていく。

スコーチのヒートシールドに、皆が焼かれて蒸発していく。ワタシはカレル。

エイペックプレデターズの最年少傭兵。

冷房の効いた心地よいコツクピットの中、悲鳴を上げて、燃え盛る業火に飲み込まれていく兵士たちを見て、歓喜に震えている。

死だ、死が雁首揃えて迫つてきてる。

死神が大鎌を振るように、ワタシがヒートシールドを押し付ければ皆が消えてなくなる。

脳内を快楽物質が高速で駆け巡る。

気持ちが良い、クルクルクルクル、キュンキュンする。

死が、死が支配するこの場所にいるときこそ、ワタシは生きてることを実感できる。

薬がなければ苦しくて仕方ないことも、全部忘れて気持ち良くなれる。

見つけたタイタンにまたテルミットを直撃させる。ジユッて音と一緒に装甲が溶けてなくなる。

クルクルクルクル、お腹の奥が熱くて気持ちいい。

『フレイムコア発動』

『いかん！全員散……うわああ！！』

スコーチが両腕を大きく振つて地面に叩きつける。

テルミットの津波がタイタンを溶解させて、鉄屑に変える。一気に3体、まだまだ来る。

打ち込んだテルミットで複数焼けて、コアがまたチャージ完了になる。

もう一発フレイムコア、さらにフレイムコア、とどめにフレイムコア。

終らない焦土が作られて、ワタシ以外は皆死んでいく。

「入れ食い、入れ食いい……イッヒヒヒヒ」

血液中に麻薬^{興奮剤}が投与されて、気持ち良さが止まらない。

ずっと天井に上つて降りてこれない。

プカプカ、クルクルクルクル、気持ちいい。

それなのに邪魔をする獲物が表れる。

大体7体ほど焼き殺したときだつた。

空からフォールしてくるタイタンが二機。

ハーベスター級モナーク、おそらくレベル3。

篝のローニンがソードコアを発動させながら、そのうちの一體に突っ込んでいった。

ワタシもワタシで、残った方に向かう。

多分アクセラレータ特化型、アーク弾を使用していて、ヒートシールドのエネルギーを削れるもの。

とすれば当然ワタシから逃げるように距離をとりつつ、アクセラレータを掃射してくる。

鬱陶しいことこの上ない、ヒートシールドも直ぐに空になってしまふ。

テルミットランチャーを撃ち込みはするけど、こっちの方が削れるのが早い。

イライラする、あれを沈めたい。

「スコーチ、投擲焼夷トラップ」

『了解』

ワタシの言葉に反応して、スコーチが手元に焼夷トラップを持つ。でもその焼夷トラップは通常の物じやない。

BBに改造されて作られた、先端が尖った焼夷トラップ。

これは投擲して、敵に直接焼夷トラップを刺せるようにしたワタシ専用焼夷トラップ。

当たれば常時敵は焼夷トラップに引っ掛かり続けるのと同じにな

る強力な武装。

今回搭載して貰つたこいつで……。

「つぶれちやえええ！」

綺麗な投球フォームから投げ出された焼夷トラップは、螺旋を描いて見事モナークのコツクピットハッチに直撃。これにはさすがに向こうもこんなカスマムをしてるとは思つてなかつたようで困惑。

その隙にランチャーを打ち込み、着火。

一瞬にして火だるまになるモナーク。

その装甲もあつという間に溶けていく。

『冷却が間に合わないっ！あ、あ、あ、あ、!!』

肉が焼かれる悲鳴が無線越しに聞こえる。

心地良い、酔いしれる。

嗚呼、気持ちいい。

だけれど、そこからワタシに油断が生まれてしまつた。

瞬間背後から聞こえる駆動音。

なんだと後ろを向けば、光輝くもう一体のモナーク、それに捕縛された箒のローニン。

あの光は、おそらくニュークリア。

いけない、気づくのが遅すぎた。

もうこの距離だとスコーチの足では逃げ切れない。このままだとニュークリアで粉々になつてしまふ。

仕方がない、脱出しよう。

スコーチのコアを回収、シャーシを脱ぎ捨てる。

『やつてしまひましたね』

「反省すれば良い……んつあつ……」

ニューラルリンクが外れて、視界がもどる。

脱出機構を作動させて、さあ空へ飛ぶ……その時だつた。衝撃が機体を襲う。

それはあまりに強烈で、スコーチの体が真横に倒れてしまった。おそらくノーススターの最大チャージプラズマレールガン。

これにより横になつたスコーチ。

空へと射出される筈だつたワタシとスコーチのコアは、なんと最悪なことに箒のローニン目掛けて吹つ飛んでしまう。

まずい、非常に不味いこれはダメダメ。

ぶつ飛んだ咄嗟に箒のローニンにライドしたけど、どのみちこのままじゃニユークリアで！

「ダメ、死ぬ……死ぬ？」

死んでも良いんじやないか？

どうせ生きてたつて、こんな戦争でしか生きてることを実感できない。

箒の授業は楽しいけど、何故か脱出しようとしない箒。

つまりこのままなら箒も死ぬ。

そして、その楽しみだけがワタシのもう一つの生き甲斐。

なら死んでも良いんじやないか。

薬の副作用で苦しい日々を過ごすのは、もう疲れた。

ほら、ちょうど薬の効果がキレて、ネガティブになつてきた。

もういいじやないか、死んだつて。

悲しんでくれる人なんて居ないんだから。

死を受け入れよう、ワタシは、
ゆつくりと瞳を閉じる。

ニユークリアの爆音が高まる。

世界が白くなつていく。

そして、すべてが熱に溶け込んでいった。

筈だつた。

第二章・帰還、学園の始まり

ACT14 入学前日譚

姉さんに回収されてから数週間がたつた。
この世界のことをカレルに学ばさせていた。

ISのこと、女尊男卑のこと、宇宙レベルのこと。

そして、私の想い人であつた織斑一夏が何故か女性しか動かせないはずのIS、インフィニット・ストラトスを動かしてしまい、IS学園に入学することになつたこと。

カレルはあまり興味がないように、ふーんとしか答えてなかつたが……それから喜ぶべきことだらう。

なんと、カレルの体から薬の副作用が無くなつていたんだ。
本人もこれには戸惑つていただけど、悩みの種が消えて嬉しそうであつた。

でもさすがに無くなつた手足は機械のままだつたが。

それから、姉さんによると私が帰つてこれた理由には、フェーズシフトが関係してゐるらしい。

何らかの弾みでフェーズアウトする座標がぶれて、この世界に戻つてきたと言ふことだ。

つまりギリギリニユークリアからは逃げれたと言うことだ。

ならローニンのシャーシも、この世界のどこかに來てる可能性があり、現在それを姉さんが探しているところだ。

カレルはなぜ一緒に來たのか聞いたら、私を捕まえたモナークのニュークリアから脱出しようとした結果、不幸にも脱出中に攻撃を受けて機体が転倒、発射された方角が私のローニンだつた。

ついライドしてしまつたが、フェーズシフトを私がしてなかつたら、私と一緒に核の炎に焼かれて消えていたと言ふことになる。
かなり運が良かつたのだな私もカレルも。

「んーなかなか見つからないねーもしかしたら海の底か火山の中に出ちやつたかもね」

……本当に運が良かつたのだな、私たちは。
ローニンのシャーシが仮にそんな過酷環境に放り出されてるなら

良しだ。

極秘情報は抹消されたと言つて良いだろう。

どのみち、ローニンのデータは私しか閲覧出来ないしな。
この世界にタイタンは危険すぎる。

I Sの下位互換と思われるかもしれないが、宇宙空間での活動はこ
ちらの方が上なのだから、まだ早いと思う。この世界の人々が知るには。

そう姉さんが言つていた。

「なにより話を聞く限り、タイタンのシールドって、I Sのシールドの
倍近く固いんだよね、再生能力もあるし。機動性以外は I Sより
ちょっと優秀かも」

さすがに絶対防御が無いのは頂けないと付け加えて、姉さんが
呟いてたつけ？

「それで、篠ちゃんはどうしたい？」

姉さんが私に聞いてくる。

それは私がこれからどうするかについてだ。

私はもうこの世界の篠ノ野篠ではなくなってしまった。

年齢も違いすぎる。

あの世界での濃い五年間は、私という存在を大きく作り替えてし
まつた。

それでも許されるというなら、私は一夏の側にいたい。

「一夏に会つて、想いを伝えたい……」

「なら行っちゃいなよ、I S学園！・篠ちゃんの見た目なら、高校生でも
通じるよ！」

そんな無茶を言う姉さん。

そりや私だつて行きたいさ。

でも戦場で生きてきた私に、今更高校生活なんて出来るのだろう
か。

「できるよ、今からでも！」

笑顔でそう答える姉さん。

それはとても綺麗だと思つてしまつた。

でも本当に出来るのだろうか。

「そんなに心配なら、カーチャンも連れてく？」

そういつて、カレルに目を会わせる姉さん。

そのカレルの目は意外なことに輝いていた。

「ワタシ、学校行つてみたい……楽しいところなんですよ？」

楽しいところか、私はそうではなかつたが……。

いや、普通は楽しいところなのかもしれない。

私は普通ではなかつたからな。

なら、カレルも連れてくのが良いだろう。

「よーし善は急げ、早速 I.S 学園に連絡だよ！」

そういつて、姉さんは元気よくよくわからない機械を触りだした。きつと姉さんだけにわかる何かなんだろう。

こうして、私は結局一夏を追つて、I.S 学園にはいることにしたのだつた。

ACT15 入学試験

『専用機使わない?!折角作ったのに!』

姉さんの悲痛な叫びが、試験部屋中に響く。

私が姉さんが作った私の専用機【紅椿】を使うのを拒んだからだ。なんでも、私の誕生日プレゼントとして作つてたらしいが、どうせこのあと入学試験に出るのなら、使つてくるといいとのことだつた。だけど私はそれを断つた。

純粹に、私にはまだ早いと思ったからだ。

まだ私はISをほとんど知らない。

タイタンとISの操作はかなり似てる姉さんは言うけれど、空中での戦闘は経験がない。

宇宙空間での戦闘と似てると言う人もいるが、それは違う。

宇宙空間とは違い、地球には風も重力もある。

推進剤の減りが早いし、慣性の効き方も変わつてくる。

何よりもISはタイタンより小型かつ速い。

そんなものをいきなり専用機で扱える気がしなかつた。

まずは汎用機で戦闘に慣れることを目的とした。

汎用機は誰でも使えるようにしてあるから、実際のところ、使い手次第では専用機より遙かに強い。

専用機とちがつて、どんな環境にも適応できるしな。

私のローニンもかつてはなんのカスタムもしてなかつたから、実質汎用機だつた。

私の戦闘スタイルを確立するためにも、まずは専用機より汎用機で腕をならしたかつたんだ。

まあ、それなのに初陣が入学試験と言うのもあれだがな。
ちなみに同意件でカレルも汎用機を選択した。

私は日本の汎用機【打鉄】、カレルは【ラファール・リヴィアイヴ（通称ラファール）】を選んだ。

まあ結局どちらもいつもの武装を積んだのだが……。

そう私はショットガン、カレルはテルミット武装一式を。

まずはタイタンでの戦法が通用するかどうか知りたかったのでな。

『パイロット、ご無事を願っています』

紅椿に搭載されたローニンが私に呟いてくる。

結局、紅椿は使わないけど預かることになり、ローニンのコアを移植してもらつた。

待機形態として、今は鈴のついた腕輪になつてゐるが。

「さすがに死ぬことはないと思うけどな」

試験様に置かれた打鉄に乗り込み、ローニンに返答する。

試験の準備はすでに終わつてゐる。

あとは試験官からの指示を待つだけだ。

『篠ノ之箒さん、どうぞ』

呼ばれた、さあいくか。

私は打鉄との接続に少し違和感を覚えつつも、試験場へと向かう。タイタンのより反応が鈍いな、神経を直接繋いでる訳じやないからか。

まあそれは仕方ないことだ。

まつすぐ機体を進めていけば部屋が広がり、試験場へと繋がる。

そこに鎮座するのは一体のラファール。

おそらく試験官だろう、緑の髪を持つた眼鏡の人だつた。

『私があなたの試験を担当する、山田真耶です。よろしくお願ひしますね！』

「こちらこそよろしくお願ひします」

挨拶礼儀は大切だ、頭を下げて敬意をはらう。
しかしそれと試験は別だ。

語られた試験内容はこうだ。

試験官の撃破、あるいは制限時間までの生存。
勝利条件は以上の二つ。

撃破されたら負けだ。

まあ撃破されても受かることがあるらしいが、できるなら勝ちを取
りに行きたいな。

『それでは始めます!』

そう山田さんが告げると、カウントダウンが始まる。

視界の端、HUDにアップされ、3から下がっていく。

やがてついに1がGOに変わり、開始が告げられた。

瞬間私は打鉄に存在して物理シールドを前面に展開しつつ、左手にショットガン、右手にブレードをコールする。

やはりイメージで武器を呼び出すというのはなれないものだ。

一応即座に呼び出すことには成功したが、さてここからだ。

真っ直ぐまずは突つ込み、シールドの合間にからショットガンを発射する。

もちろんこれはあつさり右側に避けられ、反撃とばかりにアサルトライフルが掃射される。

スピードはこちらが負けている、経験から来る操縦テクニックの違いだろう。

だがこちらとて五年間戦場を伊達に走つてきてる訳じゃない。

物理シールドのお陰で、まだこちらには一発もダメージが入っていない。

散弾を先読みで置いていく、広範囲に散らばるから、先読みで置かれれば回避は難しい。

私の背後をとろうと回り込もうとする度に先読みで散弾が飛んでくるのはたまたものじやないだろう。

しかしこのまま固定砲台で終われるわけなどないことはわかつてる。

山田さんが次の手を打つた。

それはスマートだ。

スマートグレネードと私に投擲、普通のグレネードと思つた私はそれを迎撃、瞬間炸裂する煙幕。

視界がホワイトアウトし、なにも見えなくなる。

成る程、こうして視界を潰したのちに、外からライフルを連射して撃破する腹積もりか。

しかしそれは私には無意味なことだ。

精神を研ぎ澄ます、聴覚を集中させる。

戦場で嫌と言ふほど鍛えられた私の耳は、一対一でそれ以外に音がない状態なら、ほぼ見ているのと変わらないほど鋭い。

そしてISはブースターで補助的に動くためか、タイタンに比べて小さいとはいえ騒音が目立つ。

つまり分かりやすい。

これが味方も含めて複数だつたらわからなかつただろうが、これは試験でタイマン。

聞き落とす訳がない。

「そこかっ！」

耳がとらえた、一気に速度を上げて音のする方へと向かう。

大当たりだ、そこにはサブマシンガンを二挺構えて、さあ掃射しようとする山田さんがいた。

『ふえ!?』

「チエストオ!!」

ブレードを水平に薙ぎ払い、サブマシンガンを二挺とも両断し、さらに山田さんの懷に飛び込む。

ショットガンの銃口を突きつけ、1、2、3、4。

薬莢が4つ排出され、弾丸がゼロ距離で山田さんの腹部に直撃する。

かはつと空気が押し出される音が聞こえる。

絶対防御が発動して、シールドエネルギーを大きく削る。

『つう、はあ!!』

このままではやられる。

そう考えただろう山田さんが、私の顎口掛け膝蹴りを繰り出す。

これを私は少し離れることで回避、土草に紛れてもう一度ショットガンを発砲しつつ距離をとつてしまつた。

あのまま密着していた方が賢いのだろうが、ダメージはなるべく受けたくない癖がついている。

ローニンという軽量級に乗っていた為ついた悪い癖だ。

打鉄は防御の優れた機体、多少打撃を受けたところで何の苦でもない。

ごり押せば良かつたのだが、やつてしまつたものは仕方ない。距離をとつたことで、不利になるのはわかっている。

再度銃を構えられる前に接近する。

銃を構える狙う撃つの3動作が必要だ。

即座に構えることはできても、狙う時間はない。

ショットガンをしまい、ブレードを両手持ちにする。

気分はソードコア、ローニンと共に培つてきた剣術をフル稼働させる。

また取り出した銃を縦に切り伏せ、下がり体制を建て直す暇をえずには柄尻で胸元に抉るように打撃を与える。

怯んだその隙に首に一閃、体を捻り股下から切り上げ、流れで唐竹にたたつ切る。

「篠ノ之我流、紫電！」

間髪入れず腹に横蹴りを食らわせ、その隙連続で切る。

右袈裟懸け、左薙ぎ払い、受け身をとろうとした方向とは逆から切り潰し、受け身をとらせないで切り続ける。

斬る、切る、キル。

鉄が軋む音と、山田さんの悲鳴が続く。

止めに切り上げを放ち、その身を試験場の壁面へと叩きつける。

それでまだ終わらせない、キル確認を怠れば待つのは死。

後を追うように接近、油断はしない。

壁面に叩きつけられた影響か、土煙が少し上がつていて、確認がしづらい。

それでも、確実にゆっくり近づく。

そうして土煙が晴れれば、結果が見えてくる。

そこには倒れて動かない山田さんがいた。

これは文句なしだろう？

『勝者、篠ノ之箒』

試験場に、私の勝利を告げるコールが響いた。

ACT16 再会

篠ノ之箒の生存確認。

それは世界を揺るがすニュースとなつた。

消息不明だつた篠ノ之箒の生存が、篠ノ之箒本人によつて確認され、その友人と共にIS学園に入学させろと命令があつたのは、記憶に新しい。

それでも一応試験は受けてもらうということで、篠ノ之箒とその友人カレルは入学試験を受ける。

しかし二人はこれをなんなく突破、篠ノ之箒にいたつては、打鉄でしかもシールドエネルギーをほぼ減衰させることなく教官を撃破し勝利したことで、一年生の主席に輝くことになつた。

流石はISの産みの親の妹、その評判は高かつた。

しかし、いざその姿を見て驚くことになる。

なんと最後に確認された数カ月前の彼女とは比べ物にならないほど大人びていたのだ。

身長もかなり伸びており、本当に篠ノ之箒その人かと疑いたくなる。

だが篠ノ之箒によつて、本人であることは確認済み。

なんでも訳あつて成長促進剤を打つことになり、二十歳前後の肉体になつているとのことだ。

そんなものがあるのかと疑いたくなるが、篠ノ之箒の言うことだ、なんでもありの彼女が言うのであれば真実なのであろう。

なんにしても、篠ノ之箒は一年生主席として、IS学園に入学することになつたのであつた。

これが世間一般的に報道された私に関するこ。

流石に別世界に五年も行つていたと言うわけにはいかず、成長促進剤を打つことにした。

姉さんへの世間の悪い意味での信頼は厚いから、こういう強行手段

もとれたわけだ。

そうして、私は今 I.S 学園の一年一組の教室にいる。

机の上に表示される電光記事を見ながら過ごしていた。

カレルは残念ながら 4 組に行くことになり、同じと言ふわけには行かなかつたが、まあそれは仕方ないことだ。

休み時間にいくらでも会えるしな。

さて、問題はここからだ。

視界の端にちらりと写る影。

それは骨格からしてどう見ても男、女性しか動かせないはずの I.S を動かしてしまった男。

私の想い人、織斑一夏。

流石に緊張しているようだ、先ほどから落ち着きなくあちらこちらを見ている。

あ、目があつた。

久しぶりの彼の顔は、時が経つても変わることない好青年のものだつた。

感慨深くもなる、ふつと微笑んで彼に手を振る。

すると少し安心した様子で、一夏は机に向き合つた。

少しあは緊張を解すことが出来ただろうか？

そんなことをしていると、教室に入つてくるものが一人。

それは私の試験を担当してくれた山田さんだつた。

このタイミングで教室に来るということは、これからは山田先生と言うことだろうか？

「皆さんはじめまして、今日からこの一年一組の副担任を務めます、山田真耶です。皆さんよろしくお願ひします！」

その予想は当たつていて、自分の自己紹介を始めた山田先生。

これはこれはこちらこそというものだ。

「はい」と返事をし、それに応答する……ん？

何故か私以外誰も声をあげない。

後々考えてみたが、あの時全員の視線が一夏に向いていて、誰も山田先生を見ていなかつたようだ。

つまり入室すら気づいてなかつた可能性があるわけで、私のはいでようやく気づいたといつた感じだ。

遅れて全員からはいの声が上がる。

それを聞いて、一気に安堵した表情を見せる山田先生。

試験の時はそうではなかつたが、実は表情豊かだつたりするのどうか？

そんなことを考えていると、自己紹介が始まつた。

さて、私はどんな風に自己を紹介すべきだろうか。

自分からあの篠ノ之束の妹と言うのは、姉さんに甘えてる気がして何か嫌だ。

かといって傭兵してましたなんて言えるわけないし。

困つたぞ、自己紹介とはこんなに難しいものだつたか？

無難に趣味とかでも話せばいいのだろうか。

「織斑くん？」

そんなことを考えていると、唐突に一夏の名前が呼ばれた。おそらく一夏の順番が来てしまつたのだろう。

少し慌てた表情で立ち上がる一夏。

ガチガチに緊張しているのが丸分かりだ。

あんな状態で大丈夫なのだろうか。

「お、織斑一夏です！」

まず名前を言つた、そこから何を言うのだろうか。

しばらくの沈黙、名前の次はなんだ、早く言えと周りの女子たちからの圧力がかかる。

「以上です!!」

なんでだ！

そこで何故以上なんだ。

頭が真っ白になつてなにも考え方なかつたのか？

私を含め、クラスのほぼ全員がキレイな角度でずっこけた。

その直後にキレイなパーンという破裂音が響いた。

何事かと頭を上げてみると、一夏が頭を抱えて蹲つっていて、その一

夏の前に見慣れた人物が立つていた。

織斑千冬、一夏の唯一の肉親で姉。

そして第一次モンドグロツソの優勝者で、ブリュンヒルデの称号を持つた女性。

あの世界で例えるなら、非合法バトル・ロワイアル競技エイペックゲームでのチャンピオンと言ったところか。

エイペックスゲームは、3人1組のチームが20組の計60名のバトル・ロワイアルゲーム。

いつから始まつたかはわからないが、主催はブリスク。

エイペックスプレデターズの傭兵スカウトのために始めたらしい。優勝者には莫大な大金が支払われ、ブリスクのお眼鏡に叶えば晴れ

てエイペックスプレデターズにスカウトされるという仕組みだ。
たしかスカーもエイペックスゲームでチャンピオンになつたからスカウトされたんだつたつけ？

そんなことを考えていると、一夏が千冬さんに。

「千冬姉、何でここに!?」

と、驚いた様子で叫ぶがまたしても破裂音。

織斑先生だと叱つた後、教壇に向かい、そこで声を大にしてこう語つた。

「諸君をこれから指導していく織斑千冬だ。私の仕事は、お前達のた
だの15歳を、多少使える16歳に仕上げることだ。私の言うことは全
てはいと答える。できないとは言わせない、できないならできる
までやらせる。以上だ」

パイロット養成所を思い出すかのよう、軍隊式挨拶を述べて、千
冬さんは教壇から降りる。

するとまるでスタンングレネードでも投げられたかのような爆音が
辺り一帯を支配した。

原因はほかの女子生徒たちだ。

北九州から来たとか、ずっと会いたかつたとか。

さすがはブリュンヒルデと言つたところか。

肝心の千冬さんは実に鬱陶しそうにしているが。

この様子だと毎年こうなんだろうな、気が滅入るのが分かる気がす

る。

そうして怒濤のうちにS H Rが終わつてしまい、自己紹介は各自ですることになつてしまつた。

前途多難だが、まあ戦場よりはましか。

「箒……だろ？ ちよつと良いか」

一夏が声をかけてきたのは、丁度H Rが終わった直後。

少し嬉しく思うも、積もる話もあることだ、屋上で話し合うことにした。

そうして屋上に着くと、最初に話を振つてきたのは一夏からだつた。

「新聞見たぜ、一体何処にいたんだよ。心配したんだぜ」

新聞。

おそらく私の失踪に関することだろう。

これに関しては、流石に一夏といえどまだ真実を話すつもりにはなれなかつた。

信じてもらえないだろうと言うのもあるが、人殺しだと一夏に知られたくなかつたのが大きいだろう。

「それにしても、綺麗になつたな箒」

さらつと、爆弾を落としてくる一夏。

昔の私なら動搖でどうにかなつてしまつただろうが、流石に五年もたてば精神に落ち着きが見える。

「そうか？自分ではわからないが

そう答える。

一夏は続けて、凄く綺麗だぜと嬉しいことをいつてくれる。

少し自分でも顔が綻ぶのがわかつた。

「それじゃあこれからよろしくな、等！」

「ああ、よろしくな」

そういつて、私たちは教室に戻るのであつた。

一夏は変わつてなかつた。

幼い頃の記憶のまま、それが嬉しくて、私は喜びを隠せなかつたのであつた。